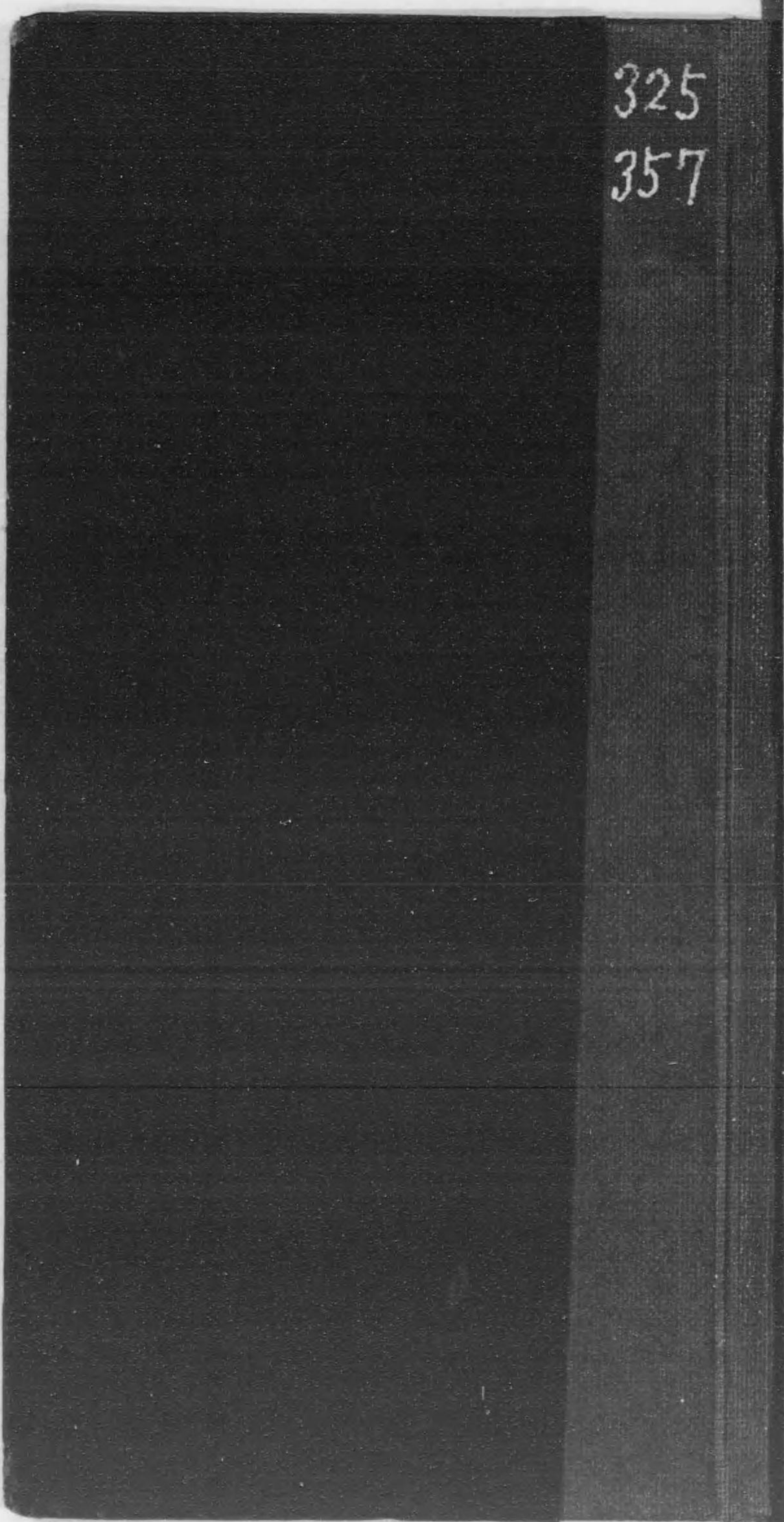


始



325
357



23102



藥

稻村修道著



はしがき

年少ふして佛門に入つた私は、十九の年に父を喪ひ、その翌年恩師の遷化に遭ふた。爾來東西に遊學して、多少の世路の辛酸を嘗めた貧家に育ち、貧苦の中に學び、今尙貧に苦しんで居る私は、貧苦の何たるを解してゐるつもりである。一たびは父を喪ひ、二たび慈愛深き師の遷化に遭ふた私は、死別の悲哀を解してゐる。今も尙迷へる私は、過去に於ては尙深く迷へる者であつた。名譽にあこがれ戀にもだへた。短かい三十年の間には、可成苦しみ迷ふたつもりである。

「應病與藥」の一篇は、謂は、私が此間に経験し來つた煩悶と、その煩悶に對する解脱の道の記録である。よしや録し得て深刻ならずとも、説て徹底し得ざる所ありとも、自ら経験し、自ら得たる所の者、人に向つて説く時、世間同様の煩悶を感ずる人に對して、解脱の縁ともなるであらう。

私は近頃妻を娶りて、新生涯に入つた。本篇を舊生涯の記録として、この新生涯に導き給へる佛の恵を感謝する。

大正四年春四月

稻村修道しるす

應病與藥 目次

第一章 酒と人生……………(宗教道德及び衛生に關して)……………一

第二章 新生涯……………(免因教誨)……………二六

第三章 棺前の説教……………(遺族慰安)……………五一

第四章 寄合 咄……………(家庭講話)……………七八

第五章 武運長久……………(軍人講話)……………八九

第六章 人生と宗教……………(青年講話)……………一〇六

第七章 懺悔の花……………(監獄教誨)……………二二

第八章 古塔の文字……………(青年講話)……………一四二

第九章 惡魔降伏……………(惡魔の研究)……………一四九

第十章 夢の生活……………(青年講話)……………一六六

第十一章 病牀の慰め……………(臨床法話)……………一七六

第十二章 明日主義……………(青年講話)……………二三〇

第十三章 放蕩息子の教誨……………(放蕩者教誨)……………二三二

第十四章 老人の慰安……………(老人講話)……………二三四

第十五章 生活の妙味……………(人生觀)……………二四三

第十六章 われらのよろこび……………(同)……………二六八

第十七章 春宵閑話……………(雜話)……………二九一

以上

應病與藥

第二章 酒と人生

稻村修道著

(酒に関するいろいろ)



古い川柳や諺にも「酒なくて何のおのれが櫻かな」とか「酒は
 憂の玉帯」などといはれてゐる酒は、まことに人生に縁の深いもの
 で吉凶禍福に伴つて人の心を喜ばせ又慰める。もつとも泣上戸怒

り上戸なごいふ厄介なものもあつて、酒を飲むと何でも無い事に泣き出したり、無暗に怒り出して亂暴をする者もあるが、さういふ性僻を持つてゐる人には、酒の爲に感情を興奮させて、其の泣く事、怒る事が愉快であつて泣きながら怒りながらも、其の人は愉快なのである。恰かも芝居を見てゐると、悪人が威張つて善人が窘められると、見物か怒り出す。又、主人公の才子佳人が薄命であると同情の涙を濺いで泣く。怒つたり泣いたりして何が面白いかといへば、ツマリ、各人の持つてゐる道義心が、俳優の所作といふ刺戟によつて義憤となり、同情心が發露して所謂「悲哀の快感」といふものを興へる。芝居を見

ても泣きながら怒りながらも、精神に慰安を得る如く泣上戸、怒り上戸は泣きながら怒りながら、精神に愉快を感じてゐるのである。それから面白いのは、酒無くて何の己れが櫻かなといはれるやうに、一寸一口飲める者に取つては、酒無くては折角のお花見でも、芝居でも面白味が少い。お辨當を拵へて、一瓢を携へて行く。花が咲いてゐるのが美しいと言つては、飲み花が散るのも面白いといつて飲む。「林間酒を暖めて紅葉を焼き、石上詩を題して緑苔を拂ふ」風流も酒無くては趣が深くない。芝居に往つても左様である。幕間が長いと言つては、飲み面白いつては、飲み面白くないといつては

飲む。飲んでゐる間は長い幕間も苦にならず面白ければ尙面白く、面白くないのも亦面白い。下戸は「飲まぬやつ辨當食ふと花に飽き」と川柳にもひやかされて、どうしても没趣味になり易い。酒の力も大したもののである。これはツマリ酒を飲むと感情が興奮する、感情が興奮すると面白く無い事がますます面白からず面白い事がますます面白くなるので單に面白がるといふ點からいへば酒といふものは無くてはならぬものである。

また、一方人間は矢張り動物であつて、何か美しいものを見た時には見て喜こんでゐるだけでは満足が出来ぬ。視覚といふやうな高

等感覺の満足だけで足れりとして居ることが出来ないで、觸はるとか味ふとかいふやうな下等な感覺に訴へたがる。例へば子供を博物館などへ連れていつて美しい繪を見せると直ぐ觸りたがる、美しい玩具を持たせると直ぐ口へ入れる。人間は進化してゐて、他の動物には完全に發達してゐない、視覚の満足といふ官能を有つて居る、面白いものや美しいものを見て喜ぶのはこれが爲である、しかし一方では矢張り動物的に味覺や觸覺を満足させねば承知が出来ない。そこで花を眺めて視覚の満足を得ば直に酒なくてはと味覺が本能を發揮するのである。

人間といふものは、古い宗教や哲學のいふやうに、精神だけのものでもなく、普通の人の考へて居るやうに、肉體だけのものでもなく、心身一致のものである以上、眼で見ても喜び耳で聽いて楽しむといふやうな高尚な心の樂ばかりでもない。矢張、身體の慰安物として、飲んで樂しむ酒が入用である。一日中働いて疲れ切つて居ても、一杯の酒で其疲勞を休め頭を使つて氣分が重くなつて居る時にも、一杯の葡萄酒で元氣を回復するといふやうな事は、各自が常に經驗して居る所である。醫學の上から酒が人體に有益な點は、いろ／＼證明して居る。況んや酒は憂の玉箒程よく飲めば百藥の長と言はれる。

て心の憂も時に一掃する、肉體に利益を與ふる物は、また心にも利益を與ふる。酒は程よく飲んでさへ居れば、人生の有力な慰安物である。

(三) 酒の歴史

さて酒と人生の話を進める順序として、酒の種類や歴史を一言して置かう。一口に酒といつても、其の種類は頗る多い。日本酒の清酒、濁酒、味醂、焼酎、西洋酒では、麥酒、果酒、葡萄酒、沸騰酒、火酒などあり、其の原料も、米、麥、玉蜀黍、馬鈴薯、葡萄酒、林檎、其他の果實などあつて、一様で

はないが、こゝでいふ所のものは、總べて、アルコールを含有する嗜好飲料を指して酒といふのである。

酒の歴史は極めて古い。東洋では二千五百年の昔、印度で釋尊が禁酒戒を設けられたズーツと以前に太古吠陀の時代に既に蘇摩といふ木で酒を作つて神に供へた經文がある。支那では諸君がよくお讀みになる『十八史略』にも「禹ノ時ニ至テ、儀狄酒ヲ作ル、禹飲之ヲ甘シトス、曰後世必ズ酒ヲ以テ國ヲ亡ス者有ラント、遂ニ儀狄ヲ疏ンズ」とある。儀狄こそ迷惑である。禹といへば堯舜禹湯と並び稱せられて支那文明の先祖、理想の天子様であつて、凡そ四千年

も前の話である。又西洋でも、大昔の神話や詩の中に、酒に關する物語が多くある。我が日本では、日本に歸化した韓人が始めて酒を造つて、酒看都といふ姓を賜ふたといふが、神代の昔にも、ある種類の酒はあつたに相違ない。兎に角、酒は人類自然に嗜好物として殆んど、日常の食物と一緒に嗜好され、お釋迦様が禁酒戒を設けられたにも拘はらず、耶蘇教の或る宗派が飲酒を嚴禁するにも拘はらず、禹帝が醸造家の元祖、儀狄を信用しなかつたにも拘はらず、孔子様が亂に及ぶべからずと仰つたにも拘はらず、又近世の醫學上、種々有害な事を證明されて居るにも拘はらず、多くの人が身を亡しても尙喜んで飲

む嗜好物として今日に至つたものである。

(三) 人體と酒

諺にも、一杯人酒を飲み、二杯酒酒を飲み、三杯酒人を飲むと、その人が酒を飲む程度に止つて居れば、鬱を散じ、血の循環を好くし、夏は暑をばらひ、冬は寒を凌ぐ。精神上衛生上、有益なものであるが、酒に飲まれる即ち程度を過すに至つては、酒精中毒を起して、我身ばかり衛生上の害毒を受けらるばかりでなく、子孫までも害毒を與へるのである。

酒精中毒とは、過度の飲酒に因つて起る病症で、精神が無暗に興奮して、そんなに面白くない事が、無暗に面白かつたり、何でも無い事に泣いたり、怒つたりする。笑上戸、泣上戸、怒り上戸など言はるゝものは、皆急性の中毒に罹つて居るので、脈數の増加、顔が紅くなる、といふのも同様に、軽い酒精中毒である。これが段々進んで來ると、人事不省になつたり、呼吸作用の沈衰、死亡といふやうな甚い事になる。漫性症では、腸胃加答兒、あか鼻、腦卒中、肝臟腎臟、神經病などを起すのたさうである。其の他酒が人體の各機關を襲ふことは、既に醫學上種々の試験成績によつて、證明せられて、此の事實は病院の統計にチャン

と明かに現れてゐるといふことである。中にも酒飲の子には低能
兒が多いとか、神経質の原因を爲すとか、犯罪者が多いとか、狂氣、いろ
いろの悪癖を遺傳するとかいふ事實に至つては、まことに寒心すべ
きものであつて、過度の飲酒は、我身一人の身體に害を受けるばかり
でなく、子孫に及ぼし、延びて國家社會に害毒を流すに至つては、酒害
は衛生上の問題ばかりでなく、道徳上の大問題である。

しかし、これは過度に飲み過ぎた場合に起る害毒を擧げたもので
あるが、純良なる酒を適度に用ふれば、確かに人體に有益であることは
明かである。アルコールの強い日本酒や、ウイスキー、ブランデーな

どは、何うも宜しくないやうであるが、アルコールの加はらない生葡
萄酒は、腦に興奮と滋養とを與へることは、確かである。フアウスト
を作つた獨逸の大詩人ゲーテは、生涯中に五萬壘の葡萄酒を飲んだ
といふが、これは無暗に飲んだのではなく、其の思索を活潑にし、腦の活
動力を養ふために、飲んだのだといふ。故に葡萄酒を飲む國民は、鋭敏
で、活潑である。或る西洋の學者がいふて居る。これに反して、麥酒
は、神経組織に特に或る影響を與へて、他の酒では得る事の出来ない
休養と落付きとを與へる。それで、麥酒を飲む者は、何處となく遅鈍
で、少し物足らぬ所があつて、學問で社會に立たうとするやうなもの

には都合が悪い、あまり落付すぎると言はれて居るが、しかし腦を働かす時には此の落付きが大に必要な場合がある。餘り考へ過ぎて激昂した後で、麥酒を飲めば落付くといふことである。葡萄酒を飲む者は快活であるが、激し易い。麥酒を飲む者は遅鈍であるが、落付て温和である。「英國は千年以上の長い間此の立派な麥酒を製造して來た、尙今後千年も續いて之れを製造するであらうが、此の麥酒の生理的影響を考へて見れば、彼の國の國民性の中には、激し易い所が無いといふ事を幾分か説明して居るので、これが國家安全の本となつて、彼等國民の統御し易く、荒い所行を爲る恐れ無く、各人情誼

の念を深からしむるのである。」と英國の有名な著述家ハマートンが言ふて居る。成程酒と國民性考へて見れば、面白ひ、火酒を好む露國人の猛烈な性質、熱し易い日本人と日本酒、詳しく調べてみたら面白いことであらう。要するに、アルコール分の稀薄な例へば葡萄酒や麥酒を適度に用ふれば、人體に有効である事は確かである。

(四) 酒と道徳

燈臺下暗しで日本の事はくはしく知らぬが斯ういふ事には極め

て綿密な獨逸の統計に依ると、獨逸の首都、柏林で酩酊の爲に警察の手を煩はしたものは、千九百五年に於て男子五千四百八十六人、女子五百六十人、同六年には、男が五千百十四人、女子五百五十三人と新聞に書いてあつた。酩酊して警察の手を煩はす位は何でもないが、風俗壞亂、金銭の濫費、喧嘩口論、刃傷等、酒の爲めに精神を亂して、犯罪を構成する者は、いづれの國にも其の數は極めて多い。醫學の上からまた犯罪心理學の上から、酒害の及ぼす道德上の悪影響は實に恐るべきものであらう。

しかしながら、酒と道德との關係は、又人體と酒とに於けるが如く、

藥として用ゆる程度に止めて置けば、決して害にはならぬ。孔子も「唯酒ハ量無シ亂ニ及バズ」と言はれた。これが爲に身體を壞したり、精神を亂すに至つては、既に酒を飲む目的に外れて居るので、酒は藥として飲むべきものであるといふ事を忘れてはならぬ。酒を百藥の長とするのも、百毒の長とするのも、度を過すと否とにある。近世の道德は、中庸調和の道德である。禁欲とか斷欲とかいふ風に無暗に肉欲を抑へつけて、酒は絶対に禁せねばならぬと飲んで差支の無い場合に、イクラ飲みたくても飲めぬといふやうな窮屈なものでない。飲みたいといふ所を、亂に及ばぬ範圍、藥になる範圍に止

めるやうに程よい中庸に調節する、さすれば怖ろし酒毒酒害を蒙らぬでも濟むわけである。

しかし出来ることならば酒は飲まぬ方が好い、酒も煙草も習慣の物ではじめは餘り飲みたく無かつたのが盃を始終持つて居れば終には飲まねばならぬやうになるものである。

酒を飲む者が能くいふ事だが「酒は憂の玉筥」五六杯かたむくれば憂でも屈託でも、さつぱりと掃散して心にかゝる塵もなく、泣顔忽ち笑顔となる。素面のときは心細くて、大きな聲も出ぬ人も、酒の力を借れば、傍に人無き心地で思ふだけの事が言へる。」と、しかし是

は酒の徳でなくて、却つて酒の過失である。憂も屈託も酒の力で一時は忘れる事は出来ても、それはホンの一時の事で、醒めては、一層悲しくなる。真面目に憂を掃散さうと思へば、本心から出た勇氣を以てせねばならぬ。酒で腦を亂して一時の憂を忘れ、酒の元氣で由無い事を言ふやうなのは、所謂自己を欺くもので、不道德の極である。

(五) 酒亂のさまじく

酒はたい飲まねば須磨のうらさみし
のめば明石のなみかせぞたつ

酒に本心を失ふて、あらゆる痴態をつくすのは、真面目な者の眼には見られたものでない。其の酒に亂れた痴態の二つ三つを昔の本から御愛嬌に抜き出して見よう。

江戸時代の戯作者式亭三馬が「一盃綺言」といふものを書いていろ／＼の酒癖を穿つてゐるのが面白い。先づ悪口を吐てうれしがらす酒癖、對手を怒らすより罪が浅い。盃のとりやりにむづかしい酒癖。酔た上で愚痴ばかりいふ酒癖。段々氣のつよくなる酒癖。おなじことをくどくいふ酒癖。つれを困らす酒癖。ひとり面白くなる酒癖。無益の事を争ふ酒癖の八種を擧げて居る。その外酔へ

ば無暗に人に喧嘩を吹掛け、腕力沙汰に及ぶ荒い酒癖や汚はしい所行を好む酒癖は困つたものである。

「醒睡笑」に面白い話が出てゐる。或男が酒に酔ふて歸つて寝た様は敷居に肩を置き頭を下にさげてゐる。家内の者が見付けて血が下つて苦しからうと枕を取寄せ頭をあげて、よいやうに直して置くと、眼をさまして、これは誰がした。からだ中大方酔ふたが頭が未だ酔はぬから、酒をよく環らさうと、態と頭下りに寝てゐるのだと叱つた。

又同じ本に、こんな話が出てゐる。京の一條の辻に大酒に酔ふて

前後不覺に寝てゐるものがある。又其の日鳥羽の方から用をと、のへに上つた男が、これも一杯機嫌で、其の男を見付け、其方の在所は何處かと問ふ。對手は舌も廻らぬ變な聲であまがさきといふやうなので、さては、こんな遠方で酔倒れて不便な者だと車に載せ、鳥羽に連れて歸つて、便船をたづねて乗せて遣つた。船が攝津の尼ヶ崎に着いたので、船頭さんが未だ寝て居る彼の男を起して、尼ヶ崎に着いたといへば、酔の醒めた彼の男は、變な顔をして、四邊をキヨロ／＼見廻してゐたが、自分は京の六條の者であまさき屋といふ者でござい、ますが、どうして、こんな所へ來ましたかと、忙然としてゐる。件の仔

細を聞かされて、今更鳥羽の男を恨んで見たが仕方がない、船賃宿賃に、あまり豊でない財布の底をはたき盡して、すごと／＼と歸つた。是等は皆罪の淺い無邪氣な方であるが、其の他の狂態痴態は諸君が常に目撃せらるゝ所で、耻知る者の酒に酔ふべきものでない。

(六) 佛教と酒

大抵の進んだ宗教では、酒は本心を惑はすものとして排してゐる。殊に我が佛教では、酒を不善の根元として、小乗の戒法の中には、禁酒戒を設け、大乘戒には、たゞに酒を飲むばかりでなく、不酤酒戒とて、酒

を酷つてさへ重い罪科となつてゐる。酒が本心を感はして衆惡の根元となるといふ事に就ては「毘婆沙論」に面白い話が出てゐる。或信者が性善良にして能く五戒を持つてゐた。所がある日、非常に喉が涸いたので、水と酒とを間違へて一口飲んだ所が甚だ旨い、遂に不飲酒戒を破つて心持よく酔ふて了つた。折柄我家の垣を越えて隣の雞が來た。酒に心亂れた彼は面白半分、其の雞を殺して食つて了つた。不殺生戒を破つてしまつたのである。そこへ隣の内儀さんが雞の事を尋ねて來たのを、捉へて戯れ不邪淫戒を破つた。隣の人が怒つて官に訴へた。けれども彼は其の事實を否定して、不

妄語戒を破つた。斯ういふ次第で、可惜持戒堅固な佛教信徒も飲酒の爲に、むざむざと破戒の惡人となつてしまつた。故に「酒は迷亂起罪の本」と説き、「酒を飲めば則ち不善の門を開く」と酒を飲む者は元より、測ぼつて酒を酷る者まで嚴重に戒められたのである。しかし、佛教の戒法は極めて融通の利くものであつて、酒の害毒のある方面からは、嚴重に飲酒を戒められたが、其の衛生上有益な場合は、飲んで差支ないとせられた。「分別功德經」に病んで酒を求むる比丘に、飲酒を許された事を説けるが如きは、好個の一例である。佛教が酒に對する考は、此の一事で明瞭であらう。

以上人生の慰安としての酒の歴史と道徳人體に及ぼす酒の
効果酒と佛教などの諸方面から我等の生活に酒が如何なる關係を
持つてゐるかといふ大體を話したつもりである。また酒に關する詩
歌や逸話の類を擧げて酒に關する面白い話をして見たいが長談義
になつたからこれで止める。

要するに酒は數千年來人間の嗜好物となつて今日に至つては人
生に最も因縁の深い飲物となつてゐる。性質の悪い酒を飲過ての
害は衛生上道徳上怖るべきものであるが純良な酒を適度に飲む時
は身心に有効である。而かも前にも述べた通り酒は人心に影響し

て國民性にまで影響して居るとすれば酒の改良は食物の改良と共に
に重大な國家問題である。

日本人は酒を好む國民である。そして餘り酒癖の善くない國民
である。我等が用ひて居る日本酒はむつかしい化學上の分拆は知
らぬが經驗から考へて見ると葡萄酒や麥酒に比べて人體に害の多
いものらしい。日本人の國民性の短處が熱し易く興奮し易い日本
酒のやうなら純良な葡萄酒や麥酒を用ひて腦の活動力を強め而も
沈着なる英吉利人や獨逸人の長所を學びたいものである。

第二章 新生涯 (免囚教誨説教)

七月某日、姫路の監獄を出た二人の免囚があつた。其の一名は予の血縁に當るもので、彼は本年二十六歳で、素相當の地位名望ある家に生れた者であるが、青年の虚榮心に驅れて、不良會社の社員となり、多くの地方人を欺いて金品を詐取したる廉を以て囚はれの身となり、十ヶ月の刑期に服したが、今回の恩赦により、二ヶ月の減刑の恩典に浴したものである。その前日、奈良縣丹波市町に在つた予は、彼の父兄から出迎と教誨を托され、終夜車中に在りて、如何に彼を教誨せんかを考へたが、さて實地出獄せる本人の變れ果てたる相貌に接しては、血縁の身の悲しさは思ふ

がまゝの教誨も出來ず、彼を引連れて大阪へ行く途中、断片的に語つたものを、こゝに補綴して本篇としたのである。

社會に擯斥さるゝ囚人を血縁に持つた事を深く悲しむと共に、法律の制裁に依りて、過去犯罪の報償を受け、これより新しき生涯に入らんとする者の爲に、切に社會の同情あらんことを祈る。(大正三年八月)

(一)

われ／＼がこの人生の行路を辿る道筋には、いつも其の足下に、善と惡との分れ岐が在ると思はねばならぬ。左に行くか、右に行くか、初めは只の一足違であるのだが、終には千里の差となつて來る。一

度罪を犯して法律の制裁を受け、これから新しい生涯に入らうとする人は、よく／＼此の事を胸に刻んで、今は新生涯の最初の岐れ路に立つてゐるのであるから、善と悪との一足を踏みあやまらぬやうにせねばならぬ。

心からよこしまに降る雨はあらし

風こそ夜の窓はうつらめ

人の性は善であるとか悪であるとか昔から随分と議論があるやうだが、お互が實地人間社會の有様を見れば、善人悪人は多く人の本性の上になくて、其の境遇の上にあると見ゆる。

三兒の根性は百までといふが、たとへ石川五右衛門の子と生れて、盗人の血を受けた身でも温かい人情の内に育てられ、立派な教育を受け、善い品性の修養を積めば、立派な人物となるに相違ない、たとへ石川五右衛門でも、自分の持つてゐる才能を充分に認める人があつて、用ひて呉れる大名があつたら、秀吉の香爐を取る代りに、明國を取らる大勇士であつたかも知れぬ、世を捨てたのか、世に捨てられたのか、あたらあれただけの武勇と膽力とを持ちながら、盗賊の汚名を末代に遺したといふのは、其の境遇が導いたものであらう。また、どんな善人でも、小人は窮すれば濫すで、悪い事をせねばならぬやうな身の上

になつて來ると、ツイ出來心といふ奴が起つて、知らず／＼犯した小さい罪が「水の滴微といへども漸く大器に盈つ」とお釋迦様が誠められたやうに、こんな事位はと思つた心の間違が、早や一步惡道へ踏み入つて、冥より冥の生涯を送るのはじまりとなるのである。たとへば雨は眞直に降るものであらうが、それが窓へ横しぶきを打つのは、畢竟風のためである如く、自性本來善惡は無いが、其の境遇によつて善惡に分れる場合が多い。

それだから、君子は其罪を悪んで其人を悪まずといふ、あなたがたは結局其罪を犯す出來心を抑ゆるだけの意志力を持たぬ憐れな氣

の毒な人で憎むべき人ではないのだが、罪を造らす世の中が惡かつたかも知れない。しかしながら、此娑婆世界に缺點の多いのは今に始つた事ではなくて、世間が惡いから惡人が出來るのなら、世の中は皆惡人ばかりで、皆の者が監獄の門を潜らねばならぬ筈だが、世間は惡人も多いが、善人も少しはある、貧乏しても苦勞をしても人の本分を盡して、光明ある生活をして居る人も少くはない、世間が惡いから、おれも惡人になるといふのは、人間は脆いものだから、おれは不養生するといふのと同じことで、そよ吹く風にも破るゝ芭蕉のやうな脆い人のからだであればこそ、尙更衛生を重んじて持て生れた壽命を

完まうするやうに、ともすれば、罪惡ざいごを犯し易い世の中、ともすれば悪い方はうに行き易い弱い人間にんげんであればこそ、ますます、精神せいしんを修養しゆやうして、人らしい行たごひをせねばならぬのである。

わるいとは知りつゝわたるまゝの川

流ながれて淵ふちに身みをしづめけり

とやら、誰だれでもこの邊へんの事ことには満更まんぎやう氣きが付つかぬのではないが、一度ひとたび萌もした惡念あくねんを、いや／＼と抑おさめることが出で來きないで、ツイ良心りやうしんを無理無理に抑おさめて悪い事ことをして丁しふ。して丁しつてから、あゝ惡わるかつたと氣きがついた時ときは、モウ自暴じばうになつて、わい、まいのかはよと遂つひに流ながれて身みを沈しづ

める。

あなた方がたがちやうぞそれであつたでせう、何なんといふても過去かこの事ことは逐たふべからずである、悪い夢ゆめを見たみたと諦あきらめて、これから生なれ變かつた生活せいかつに入いらねばなりません、陛下へいかの大御心たいごころは佛様ほとけさまと同じく罪つみある身みこそ尙なほあはれなりで、あなたがたにも御慈悲ごじひをかけて下くだされた。たとへ世間せけんを冷つたくとも、此この温あたたかな陛下へいかの御慈悲ごじひ、如來にらいの御慈悲ごじひのあることを忘わすれないうちは、幸福かうふくはわれらの身上みづかみに在ある。ましてや渡わたる世間せけんに鬼おにはない、世間せけんはそんなに冷つたいものではない。それはさておき、これから一生いっしやうのめでたい初旅はつたびに出でようとするあなた方がたのた

めに、何かためになる話を爲ようと思ふて昨夜もこんな話を思ひ出した。

(一一一)

これは昔の書物に出てゐる話であるが、ある所に三百石取の武家の次男があつて、としごろは二十歳前後、二十歳前後といへば、草木でいへば春から夏へかけての時候、只モウ延びよう／＼とする元氣な時代である。斯ういふ年比には兎角無分別な事が起り易い。孔子様も、

君子ニ三ノ戒有リ。少キ時ハ血氣未ダ定ラズ之ヲ戒ムルコト色ニ在リ。

と仰せられて、戀に迷ひ色に溺れて、動もすれば、一生を謬まる。此の若い武士も性慾の動くまゝに身を持ち崩して、ある婦人に關係した事から俄に土地を出奔せねばならぬ事となつた。其時はちやうど夏の頃とて、浴衣に大小ばかりで袴も着けず、お金とては一文もない。城下へ忍んで出たまゝの遊の事とて、只友達が其場で書いて呉れた手紙一通を懐中にしたまゝ、七八里ばかり隔てたるさる山寺の和尚をたよつて往つた。

何をいふにも三百石取の次男世間の事は一向に解らない。生れ
てから親の懐を一日も離れた事とては無いのに心からとて夜通し
に知らぬ道を彼の山寺へ尋ねてゆく。これほどの働を主人か親の
ためにしたら随分自慢もするであらうが今は我心から見ると
辛い目、どうやらかうやら尋ね當つて行き著いたのが山中の古寺親
の前でさへ滅多に屈めぬ腰をかいめ、殿様の前より外に下げぬ頭を
矢鱈に下げて、友達が書いて呉れた彼の手紙を出すと和尚が受取り
開て見て、此の手紙の様子ではまづ此方ではらくお暮しにならね
ばなるまい。しかし小僧とてもなし下男も使わぬ貧乏寺であれば

朝夕の御飯も炊いて貰はねばならぬ。拭掃除をしたり家事萬端に
氣を注げて貰はねばならぬのは勿論の事、又寺役のある時は寺男と
なつて穴を堀て貰はねばならぬ、まづ、そう心得て、そこで足を洗ふ
て、上つて茶粥でもお上りと、まるで目見に来た奉公人に言ひ付ける
やうに、長々と申し渡される。はい、と言ふより外はないから、足
を洗ふて壊れ茶碗を探し出して、麥の御粥を食べて見れば、ひだるい
腹にもまづい事は此上無し、カビ臭い煎餅布團一枚に括まつて眼が
覺めぬに、怒鳴り起されて、起きて見ると夜通の疲勞もやすまる事か、
猿使ふやうに追まはされ、箒を持ってば、四角な座敷を圓く掃くとして叱

られ、雑巾をかくれば縦に筋がつく。按摩はさゝれる鍬は持たさせられる。馴れない彼の士には地獄の苦である。情ないとは思へども國を立退いて見れば、三文も儲ける術は知らず泣の涙で暮てゐた。

(三)

さういふ内にも月日は用捨なく立つて、朝夕は裕でも寒さを感じ頃となつた。身に著て居るものとは國を出る時に着て出た汗まみれの浴衣一枚。ある日の事、今日は和尚さんが朝から托鉢に出られて、そこの掃除も済んだので客殿の椽に寝轉んで猫の様に丸

くなつて、日向ぼつこをしてゐながらつくつくと思へば思ふほど、どうも詰らない國からは一向便は無し、和尚さんの御機嫌も此の頃はめつきりと悪い。寒空には向ふて来る、どうしたら宜からうか。寧ろ腹でも切て死なうか。首でも縊らうかと、千々に思ひを碎きながら見るとは無しに遙か麓の方を打見やれば、一村は一目の下に擴がつて、開放した家などは家内の様子などが手に取るやうに見わるのである。折しも村の庄屋の家で、庄屋さんは人の見て居るとも知らずに村方で集めた銀を改め包み直して金戸棚の引出しへ入れてゐる。それが悉皆彼の若武士の眼に映る。

ひだるい時には魚を煮て居るにはひを嗅いでも堪らない。

盗人の目に花の咲く土用干

と云ふ面白い川柳があるが、まつたくその通りでありませう。今窮乏の極に達してゐる彼の士には、どうして其金を無心に見ることが出来やうぞ。彼は其の有様を、一ト目見るより、身にしみじみと欲しくなつて、どうしたら能からうかと、椽ばたに寝轉びながら、今まで無邪氣な彼の心には知らぬ間に早や邪念の雲が覆ひかぶさつてゐた。悪い心が起これば、悪い智慧が出る。つく／＼と足場を見れば、忍び込むには究竟の家構、家内はわづかに五人ばかり、若し見咎める者

があつたら其の時は百年目蹴散らかしてあの金を腰につけ幸ひ八月十五夜の月夜は立退くには至極好都合。首尾よくゆけば、人知れず盗み取つて京か江戸か大阪か三都の間へ出れば、どうとも身の片はつくであらう。所詮、この山寺にいつまでゐたとして、國へ歸られるわけでなし。和尚の機嫌は悪し、身は窮迫のドンズマリ、イツソ今夜立退くが上分別と上分別どころか、無分別の頂上を考へ出した。善と悪との岐れ道、彼は今其の分岐點に立つて、將に邪路に踏み入らうとしてゐるので、實に危い所である。

さて彼の若武士がいよ／＼今夜と決心して足場を篤と考へて置いて、首尾が能とも悪くとも今夜のうちに十里の道は走らねばならぬ。今のうちに一寝入して置かうと目を塞いでみても不安心で寝入る事が出来ない。可哀相に良心の呵責といふものは怖ろしいもので安々と眠られる身を持ちながら悪心が一たび萌すと早や此の苦を受けてゐる。

眠られぬまゝに、二度も三度も寝返をうつて思はず内を見渡せば、座敷の隅に六枚屏風がたてゝあつて、色紙がたに書いてあるのがお

馴染の小倉百人一首、ふと目にかゝつたは、

あひみての、のちの心にくらぶれば

むかしはものを思はざりけり

の歌彼は此の歌を二三度繰返して吟じながら、ふと歌の意味を考へてみると、何物か急に胸に徹へて俄に心が變つて来て、今夜の仕事を止しにする氣になつた。彼はしばらく氣脱がしたやうに茫然としてゐたが、急に我に返ると脇の下から冷たい汗がびつしよりと出てゐた。

この歌は御存じの通り中納言敦忠の作。名高い戀の歌である。

戀人に一見逢ふてからは心は常に戀人の上ばかりに馳せて、われは夢現にも戀の物思ひぞする。戀は楽しくして苦しく、甘くして辛い。あゝ此の思に亂さるゝ今の心よ、逢はぬむかしは、われは何の思ひもあらざりけるを、戀の苦しさをうたふた述懐である。

此の寺に居れば國からはたよりは無し。和尚の機嫌は悪いし、寒空には向ふ。小遣錢は無し、何を爲ようにも覺はなし。馴れぬ炊事や掃除は苦しい。詮方なしに起した盗心見咎められたら切殺すか首尾よく金を盗み遂うせたところで、取た後で何うなるか。たとへ京大阪へ出て立身出世をしたにしろ、我は今日からはモウ盗人であ

る。立身出世の嬉しさは、わが汗と膏の上にくそあれ。これも盗んだ金故と思ふて一生何の愉快があらうぞ。今日あらはれるか、あす召捕に来るか、と廣い世の中を挟ちいめ、あかるい世間を暗くして、この天地の間に五尺のからだの置所もないやうになつてから、後悔しても盗んだ金が返されるではなし、舊の身體には既うなれぬ。あゝ其の時の詰らなさ、今の詰らなさを比べて見たら、盗をせぬさきのつまらぬ方が、いくら勝だか知れない。盗まぬさきと、盗んでからの思をくらぶれば、むかしは物を思はざりけり。このまゝここちつと辛抱してゐたら、其のうちには國から便もあらう、滅多にう

かたへる所でないど氣が付た。實に彼は良心の囁によつて、本心に立返つたのである。

その後、お詫が叶ふて、この山寺を出たが、感ずる所があつて町人になり、一廉の商人となつてから、老後の追懐に、よくこの話をしたと鳩翁道話に出てゐる。

(五)

まことに結構なお話ではありませぬか。貧の盗とか境遇の罪とかいふことは許されぬ。昔孔子様が陳蔡の野に圍まれて七日七夜、

一粒の御飯も召上る事が出来ないで、悪者のために殺されやうとせられた事があつた。其の時に門下の子路が孔子様の御弱りになつた様子を見て、「君子も亦た窮することあるか、」あなたのやうな立派な御方でも、御困りになる事がありますかと、御尋ねをすると、孔子様が其の時に仰つた御語がありがたい。「君子も亦た窮す。小人は窮して濫す」そりや、聖人君子と言はれる立派な人間でも、窮迫する時はある。困る時はある。けれども困つても、苦しんでも、普通の凡夫、小人のやうに、盗心を出したり、無暗に歎いたりするやうなことはない。こゝが君子と小子の相違のある所だと仰せられた。

苦しき辛きは世の常である。どうか足許に横はつて居る善と悪との二筋道、これによく／＼氣をつけて、ふつと悪念が起つた時、どつこいと踏みどいまるやうにして戴きたい。それには今日から手に珠數かけて、佛敎信徒とおなりなさい。渡る世間は辛くとも佛の慈悲の懷に住む身には心はいつも別の世界に住んでゐる。この意志の弱い、どうかすると邪路に入り易いわれ／＼を翻然と正路に復す力は教に依るの外に道はあるまい。

馬授嘗謂賓客曰。丈夫爲志。窮當益堅——（馬授傳）

第三章 棺前の説教

（死別の慰藉）

兵庫縣加東郡大嶋は金物の名産地なり、此の金物問屋田中市太耶の長男全三耶君享年三十二歳にして逝く。時に大正二年十二月七日、法名を理覺淨曉居士といふ。君は資性温厚篤實而も年少より敏腕にして實務に長じ、同家が十數年にして數萬の富を成せるは君の力多きに因るさいふ。家運月に榮へ營業日に盛んならんさせる今日、君を失へる田中家の損失は更なり未だ而立を過ぐる機かに二年後に最愛の妻と二兒を遺して逝きにし君が最後の痛恨と遺族の悲歎は察するに餘あり。乃父市太耶氏は信佛の念篤き人、君逝くの夜予を請じて一座の法談を請

はる。乃ち應じて試みたるものは是也。

(一一)

御當家の壘三郎さんが、數ヶ月前から御身體が悪かつたといふ事は豫ねて承つておりましたが、唯苟且の事と思つておりましたのに、今日此頃(このころ)に亡き數に入られやうとは思ひ掛ない事でありました。六十七十の定命で、順當で逝きてさへ、死別といふ程悲しい事は無いものを、況して今夜の新佛は、纔か三十になるやならずで、親御や妻子を遺して死なれた、死なれた人の悲みは元より、遺つた貴方方の御心の内は、嗚、御悲しい事でありませう。生あるものは必ず死ぬる生者必滅

の道理は、あなた方も能く御存じであらう、たとへ其道理は能く知つてゐても、心の底から出る悲歎の涙は、とても一句半句の道理では抑へられぬ、たい共々に御歎き申すより外はない。

しかしながら、元より歎いて返らぬ此場合、せめて涙の間に一聲二聲の念佛をお唱へ申すのが、亡き人への第一の供養である。死なれた方は、息ある間は御兩親の爲め、妻子の爲めに働かれた。あなた方は、たい泣くばかりではいけません。後に遺つた者の務として、明日からは、よしや片手に涙を抑へても、片手に仕事に精を出さねばなりません。これを忘れては、イクラお葬式を立派にしても、亡き人は喜

ばれますまい御兩親方は頼りとして居られた方に先立たれて御力
落はお察し申しますすが死ぬまで働くのが人の任務でございませう、
尙更奮發して若い未亡人や孫の方を護つて貰はねばならぬ。未亡
人は昨日まで二人で事へた舅姑に、今日からは貴女一人御事へな
さらなければならぬ。昨日までは二人で育てた小さい御子方を今
日からは貴方一人御育てにならなければならぬ。思へば貴女方
の任務は重い。決して泣いてばかり居るときではなかつた。燃
立つた火も水で消ぬる。悲しいとか辛いとかいふ私共の情の火に
も、一點清凉の水を點せば、其悲歎は薄ぎませう。今夜は御通夜で時

間も長い。さぞ御勞れでもあらうが、せめて少しでも心が紛れるや
う、否明日から元氣を出して貰らへるやうに何かお話を爲ようと思
ふ。

(三)

まことに人生といふものは悲しい辛いばかりでもなく、楽しく面
白いのももなく、苦樂浮沈は糾へる繩のやうなものだと古人も云
ふて居るが、まことにソナものでありませう。一ツ嬉しい事があ
るかと思へば、又一ツ悲しい事が出来る。願れば三十二年の昔、三

郎さんを産まれた時は、あなた方は、此人の將來に限りの無い希望を懸けて、さぞお喜びになつた事であらう。追々成長されて、あのやうに立派な人となられて、當家商業の繁榮に盡されるやうになつてから、一家の杖とも柱とも思はれたでありませう。未亡人に於ても新婦以來の種々の楽しい思ひ出をされるについても、今日のやうな悲しい事は元より夢にも思ふてゐられなかつたでありませう。其夢にも思はぬ悲しい事が突然と起つて私共を苦しめ悲しめます。これが人生の常西も東も昔も今も此事實には變りはない。わけて其中にも「死ぬる」といふこと、思ひがけない人に先立たれ、千代もと

祈る人に死なれて遺瀨ない悲しみに泣く。これは、あなた方ばかりでない。御寺の墓場へ往つて御覽なさい。「古墳多くは是少年の塚」と古人もうたふたあの澤山な墓場には、人生の定命を保たずに、或は生れながらにして往き五ツや六ツの可愛盛りに死に、二十に足らずに死んだり、三十四十の世帯盛りに死ぬるといふやうな人の方が多い。子供を亡くした時は、墓場へ參つて、他處の子供の墓を見た時程、うれしい事はないとは、子供を失つた母親からよく聞く話ですが、これは、広い世界に吾身一人の事であると思ふてゐたことが、自分ばかりでなく、現に、こゝにも自分と同じ不幸な人があつたと思ふと、それ

が非常に強い力の慰を興へるからでありませう。人の心は妙なもので悲しい時、辛い時に、これが吾身ばかりと思へば彌々悲しさ辛さが身に泌みじみと徹へるが、これも世の常である。世上の習であると思ふ時、世間世上の人達が、皆我身の味方になつて呉れるやうな氣がして、強い慰安を受けるのです。「あきらめ」とは斯様に悲しい事や辛い事が多いのは、世の常だといふ道理を諦めるといふ意です。私共の教主釋尊が、人生の最も痛切の「死別」に對しての御教誨は、いづも此「あきらめ」よといふ御語であつた。

(111)
昔釋尊が祇園精舎に足を註められ、說法せられた時の事である。或る朝、阿難尊者を召連れて、市に行乞に出ようとせられた時、程近い邊に住んで居る一人の農夫が、吾が作つた田の畔に立てゐた。見渡す限り黄金の波を打つて豊かに稔れる稻を見て、彼は心喜こぶ事限り無く、明日は家内の者が打ち連れ立つてこれを刈り取る事としよう。去年も一昨年も打續いた凶作で、我家の倉は貯も最早乏しくなつて、何日の日とても充分腹を肥す事は出来なかつたが、今此のやうに豊作をしたからは、斯る憂も無くなつた。穰々たる此の稻は、我等が五

月以來の勞力の結晶である額に汗して耕し培ふた時は、鋤鋤取る身の憂さ辛さは身に泌みじみと感じたが、今となつては其の憂さも辛さも皆樂しい思ひ出となつた。其の勞力が多かつたいけ、今となつては嬉しさが彌増すのであると、農夫は獨り笑み獨り興じて零時が程は立去る事も得せず眺め入つてゐる。釋尊は此の有様を御覽になつて阿難を顧みそなはし、「汝彼の者の喜こぶ様を見よ」と仰せながら市に向はせられた。

彼の農夫は程經て欣々と家に歸つた。家には妻と最愛の一人娘が朝饗の膳を調へて、父親の歸りを待つてゐる。其の娘は久しく病

んでゐるのであるが、これを知らせば嘸心地快く思ふことであらうと歸るや否や、農夫は門口から大聲で妻や娘に稻の出來榮を告げた。妻も喜こんだ。病の牀に臥てゐる娘も喜こんで、烈しい熱氣に惱まされた爲に寢れ果てたる顔に久しぶりの笑顔を見せ、自分も早く治つて父親や母親と一緒に野良に出たいと言へば、母親はこれに對つて、今に新米を拵らへ上げて食べさせやうと慰めた。かくて久しく憂に鎖されてゐた農夫は、見事な稻の出來榮のために晴々とした彼は朝饗もそこ／＼に明日の準備に一日を暮して、樂しく眠についたのである。

然るに其夜の事である。晝の勞れに寢入つた妻が騒がしい物音に不圖眼を覺して見ると我娘は急に病が草まつて身も焦げんばかりの熱に悶わてゐる。外面に轟々と音がして降つてゐるのは定め難くない。印度の天候は一夜のうちに激變して風を起し雹を降らせてゐる。此の氣候の急劇の變化の爲に、病める娘は熱を發作して今は頼みも少ない有様である。母は驚く事限りなく夫を揺り起して娘の介抱に手を盡くしたが、定業既に盡たるものか其夜の明曉に復と歸らぬ人となつて了つた。折しも一陣のすさまじく降つた雹が風と變り篠衝くばかりの雨と變つてゐたが、日の出と共にカラリと晴れて窓を

開けば門に木は折れ水は溢れて一面の海となつてゐる。

夫婦はなく／＼野邊に娘の亡體を埋めて家に歸つたが、農夫は悲しみに堪わかねながら、とぼ／＼と昨日の田面に近づいて見ればあゝ昨日迄穰々と黄金の波を打つてゐた我田の稻は、昨夜の雹と風に莖を折られ穂は散らされて水に流されて見るも無慘な有様となつてゐた。

其日の晩方阿難尊者は一二の同行と共に村に行乞に出て、彼農夫が重ね／＼の不幸に心も打狂はんばかりになつて、誰慰めん者もないといふ事を聞き歸つて之れを佛陀に告げて居る所へ彼の農夫が

來て佛の慰安を受けん事を乞ふた其時佛は彼に告げられるやう。
農夫よ世に五つの避け難く何人も免がれる事の出来ない者がある、
一には當然消耗すべき筈の者消耗せぬやうにする事これ得べから
ざる一つである、二には當然棄て去るべき筈のものを捨てざらんと
する、是れ得べからざるの二である、三には當然病むべき身を持な
がら永久に病なからんとする之れ得べからざるの三である、四には
當然朽ち果つべきものを朽ち果すまじとする之れ得べからざるの
四である、五には萬物皆死に歸す然るに死を免れんとする、之を得べ
からざるの第五である、然るに世人は愚かにも消耗し、廢棄し、病み朽

ち死する等の眼前に現はれ來る時憂へ悲しんで自ら心を傷め身を
勞らすも、そも何の益する所があるべきか、汝に怨ある者は之れを見
て嘲ひ汝に同情ある者は之れが爲に悲しむ、悲しんで得る所は自他
の身心を痛め他に嘲けらるゝばかりではないか、汝農夫よ速に此の
道理を曉りてまた悲しむ事勿れ、汝の身に起れる不幸は汝のみに起
るものでない、最愛の子に先立たれ恃める財を失ふが如きは世の人
の常に汝と共に經驗しつゝある所ではないか、衆と共に此の不幸に
遇ひ世の常なる此の出來事に遇ひながら、何故に汝のみ斯く悲しみ
痛むぞ、と、尙も懇に種々の説法あり、理を極めての親教にさしもの農

夫の悲しみも漸やく解けて、つひに四諦の理を窮むるに至つたと云ふ事である。

諸君私は此の譚を讀んで貧しい農夫の世にも哀れな運命を徐ろに悲しく思ひ遣つて、三千年前印度に起つた出來事でありながら、ついで眼の前の事のやうな氣がして涙ぐまれた事であつたが、さて翻つてつくづくと思へば、これは決して三千年前、三千里外の彼の農夫ばかりが經驗して居るのでなく、現に今諸君と共に、私自身の經驗して居る出來事である。佛は最愛の子に先き立たれ、恃める財を失ふが如きは世の常の出來事であると仰せられたが、げに昨日までは稻

の出來榮を家内中打揃ふて喜こびながら早く新米を拵へて、明日の楽しい仕事を夢みながら寝たのが、其の夢の半に覺めて見れば、新米を食させやうと慰めた最愛の娘は死んで了ひ、其新米は流れて了つてゐるといふ人事の倏忽として定りなき總べて是の如きものである。斯る有様が世の常であつて私共は、常々斯る事實を經驗して居るのである。

(四)

さて此の道理を諦めて見れば、そんなに悲しがるにも及ばぬので

あるが、そこが凡夫の悲しさである。彼の農夫は佛の御教訓によつて、四諦の道理を證つたとあるが、どんな有り難ひ事を聞かされても道理はそうだと思ひながらも直ぐ其下から不覺の涙が湧いて來るのがお互の常である。私は決して亡き人の事をキツパリと忘れてお了ひなさい、諦めて了ひなさいとは申しませぬ。此上ない悲しい死別に遇ふて、涙一滴見せぬといふやうな事は、人にして恐らく出來ぬことでありませう、お泣きなさい、お歎きなさい、しかし諸君イクラ悲しいといふた所で、泣いてばかり居られますまい、歎いてばかり居られませぬ。前にも申しましたやうに、片手に涙を抑へても片手に

は家業を奮發されるのが、貴君方の任務であるからには、其忘れられぬ所を忘れ、諦められぬ所を諦らめて、此家を益々繁昌させて往くといふ亡き人の志を成就させて貰はねばならぬ。それについて今一つ古人の書物の中から教訓になるお話を一つ紹介いたしませう。むかし或る富豪が一人の愛子を失ふて歎き悲しんでゐた折、當時大善知識と尊ばれてゐた僧が此家へ來て申されるには、汝は愛子を先立て、悲歎に沈んで居るのは無理ならぬことながら、其迷を霧さねば死んだ子も共に迷ひ苦しまん事を憐んで、我は態々爰に來たのである。今汝の子の爲に黄金の佛像を作つて追善をなし、又汝達

の迷を霽してやらうから所持の金銀を幾程なりとも出せよといはれた。夫婦の者は貴い出家の言といひ、我子供養のためなれば、小判二十五兩と、銀一貫目を其善知識の前に出すと、然らば我れは即座に此金銀で佛像を作り、永く諸人に尊敬させるであらうと、懷中から鐵槌を取出して其金銀を直に叩き潰さうとせられた。夫婦を始め傍に見ていた人々は餘り惜しさにさて、あたたら金銀を叩き潰されるのかと惜しさうに言ふと、善知識は鐵槌を投捨て、さて、この凡夫等は何とて斯くまで迷ふ事の深きぞ、金銀は世の中に人の執着し争を起し、煩惱を増す第一の汚らはしい物である、其けがらはしい金

銀を變じて世に有難い佛像を造らうとするを、惜しげに思ふは淺ましい事である。汝達も佛縁あればこそ佛の尊とひことは能く知つて居る筈である。知ればこそ、今我前に金銀を出したのであらう、其佛の有難い事は知つてはゐても、是迄執著し、大切にきて來た金銀の形の滅するに迷ふて残り多く思ふのであらう、よく物を合點せよ、今我が金銀を滅するは金銀を無くして了ふのではない、この世をにごす不淨の金銀の形を變じて貴い佛像と成し、普く人の尊敬を受け、永く世を利益せんとするのである。しかし汝達がそんなに惜しく思ふならばもう佛像を造る事を止めて、此儘の金銀にして置かう

と大層怒られた。夫婦の者は驚いて、御尤な仰でございます、決して
惜しみは致しませぬ。金銀の形の潰るゝに驚いて、貴い佛として下
さるのを忘れておりましたと詫言つた。

出家は顔色を和げて其道理がよく合點ゆかば金銀をつぶして佛
像を造るには及ばぬ。お前方の子は死んで無くなつたと思ふて歎
き悲しんでゐるが、實は死んだのでなくて、けがらはしい人間のかた
ちをつぶして尊い佛と成つたのではないか、其尊い佛となつた事を
喜ばずして歎き迷ふは、今金銀の形をつぶし變るを悲しんで、尊像を
造るをといむるやうなものではないか。お前方こそ死なれた子の

事を歎かれやうが、子は極樂の彼方から欲垢に染けがれて此世界に
苦しむお前方を氣毒に思ふて居やう、お前方の亡くなつた子とわが
造らうとした金銀の佛像と何の變りがあらうぞ。早く此道理をさ
とつて迷を止められよ。斯う諦めた所が佛像で此外に造るべき佛
像は無いと懇ろに教訓せられたといふことである。

あなた方も此話の中にある富豪と同じ境遇である。亡き人の事
を思へば、恩愛の涙といめ難き事でありませうが、其人は今や極樂淨
土の蓮の臺で尊い佛の身となられて居る。蓮の臺を半残して貴方
のやがて御出になるのを待つて居られるでありませう。末長く友

白髪まで添ひ遂げようと思ふても、人の生命には限りがある。六十年七十年の一生も、残る半は束の間に過ぎで、やがて死別を見ねばならぬ。短い人の一生に久遠を願ふ人の希望こそ儂ないものではないませぬか。久遠と渝らぬ夫婦の愛情は佛の慈悲を得た者にのみ遂げられる。壘三郎さんは、其愛を得られた。其慈悲の中に入られた。貴方も其慈悲を喜ぶ身となれば、たとへ幽冥遠く隔つても親子夫婦の愛情は相交ふて生けるが如き和樂を得られるのである。ごうか此逆縁を菩提の種として、信心相續されるのが亡き人に對しての何よりの供養、生き遣つた身に第一のよろこびである。

(五)

私は自分が半生に得たる經驗によつて世の中の事は何でも時間が唯一の解決者であると考へて居る。越すに越されず、越されずに越すと言つた大晦日も、除夜の鐘がなつて了へば昨日の鬼が禮に來る。支拂ふべき金は一文もなく、山のやうに借金取りが來て居催促をしてゐても、まさか元日まで居催促は出來ぬから時間といふものが借金取を追拂ふて呉れる。世の中の大抵の事は時間、月日が唯一の解決者である。最愛の人に死に別れたり生き別れると鐵砲玉が足を貫通したやうなもので、當座は餘り痛いとも思はぬが、時間が經

つに従つて追々と悲痛を増すと或る西洋の小説に書いてあつたが、それもしばらくである。人間といふものは、さういつまでも喜びが續くものでもなく、悲が續くものでもない、一年たち二年経つうちに、追々と薄ぐこともありません。又一方親子兄弟は一本の木やうなもの、壱三郎さんが死なれて家の上には、いろ／＼御不自由はありませうが、言はい一本の枝である。幸二人の子達を立派に養育すれば、亡き人が生きて居られるのも同じことである。

お父さんにしても、まだ／＼お若い、六十七になつても元氣を出せば若くなる、若くとも、樂隠居になれば働けるものではありませぬ。

これからも一奮發なさつて、二人前のお働きをなさい。前々から申す通り、今は悲しんでばかり居る時ではない。片手に涙を抑へても、片手には働かねばならぬ時である。勉めて元氣を落さぬやう悲歎のうちの御通夜でさぞお疲れであります。はなはだ長ばなしをいたしました。

附記 壱三郎君逝きて墓畔の土未だ乾かざるに、未亡人はい子は夫の跡を逐ふて一月二十日逝く。享年二十九歳。本編讀者の同情を乞ふ。

第四章 寄 合 咄 (家庭講話)

□昔は佛在世の時、七月十五日僧自恣の日に、僧衆が彼方此方に集つて、自己が過去の悪行邪念を發露懺悔し合ふて、精神修養に資したといふ。まことに結構な事でお互に斯ういふ事を時々實行しようではないかと相談してゐた折柄偶然した機會で、四五人の者が集まつていろく遠慮のない、腹藏のない寄合咄をした。其の中で、次の咄が最も私を感動させたから茲に記す。

□第一番に口を開いたのが、町内で働人の評判のある表具屋さんである。今年三十一の男盛り生れは生粹の江戸ッ兒である。斷つて置くが、此會合は東京神田美土代町の某商店の二階である。

□私は御存じの通り、一昨年の冬、家内を貰ひました。爾來、何となく家の内が圓く行かないで困つて居ります。家族といつても、年寄つた母親と私達夫婦二人限、氣樂なもので、圓く行かねばならぬのです。が、お定りの嫁と姑の仲が折合が善くないので困つて了ひます。

□諍の原因は双方の言分が公平に考へて見ると、情ない事には何うも阿母さんに無理が多い。慾目かは知らないが、一體私の家内は、どちらかといへば温和い方で、大抵の事は辛抱する言ひたい事は十に七

八は言はずに済ますといふ方なんですが阿母さんはチト口喧しい方なんです。

□此間も家内が芝居に行きたいと言ひますからそれぢや久し振に阿母さんと一緒に行かうと誘つた所が二人でお行き私は留主をして居ると言ひなされる、芝居好の阿母さんが何うした譯だらうかと不審に思つてゐると若い者二人で勝手に極めて、義理合に老人を誘ふんだらうてなひがみからお留守といふわけ、それからゴテ／＼して、折角の芝居行も止になつた始末。

□萬事がこんな風ですから堪りません、母子二人限の時だつて根が不孝者の私は随分母子喧嘩もしましたが、イクラ口汚く言ひ争つた所で、其場限で済んで了ふが三人となつた今日ではさうは行かない。

□そりや阿母さん、あなた無理だなんて一口言つたが最後、近所中喚き廻られる。さればといつて大した無理も言はず、罪の無い家内を、追出したり無暗に叱る譯にも行かないし本統に困つてゐますが、このごろ、何處かでお説教を聞いて、大變感心したので家内にも染々と言ひ聞かせてつとめて阿母さんの機嫌を取らせてゐます。

□そのお説教は、孝行をしたいと思ふ時には親は無しだから少々無理はあつても辛抱せよ、一體六十七十になつた老人を若い者と同じ

と思ふからいけない。六十の三ツ兒で老では愚に返る子供と同じやうになるものだ。だから無理を言はれた時は子供と同じやうに思ふがよい。

□さて、お互に子供の時に無理を言つて母親を困らせた時にも母親は矢張り厚い慈愛ですかして可愛がつて下されたではないか。今其の御返しをする時が來てゐると思へといふんです。胸にギクリと徹へましたね。

□實際其の通だと感心して了ひました。けれども根が無教育な私にはどうかすると直ぐこれを忘れます。けれども只一つ、今に忘れ

ずにあるのは、其の説教の中にあつた斯ういふ言葉です。

孝行といふものは中々むつかしいもので、容易に出来るものではないから普通の人は別に孝行はしないでも不孝をしないやうにするがよい。

私は名言だと思ひましたね。

□家内にこれを話して、何うせまう永くない人だ。我々夫婦は何角に苦しい中にも樂もあるが、老先短い便ない年寄だ、孝行は出来なくとも、せめて不孝はしないやうにと、ふたりで心懸て居ります。

□と言つて、その表具屋さんは鼻の先の汗を拭つた。なるほど名言

である。孝行をせよといへばむつかしいが不孝をしないやうにとは誰でも心懸られる。表具屋さんの實感、まことに結構だともみんなが感心した。

□その席で私はツイ前日讀んだ松平樂翁の花月草紙を讀んで其の中に出てゐる文を思ひ出した。

□親に孝するは。このみを人となし給へる御惠。山よりも高く。海よりもふかし。また其の親もわれも子等も。かくながらふは。君の御惠なりといふはあさかりけり。そのむくひにて孝し忠する者にはあらず。人しらぬ深山の梅の花とても。かはらざるはなく。

深谷の鶯とて。なかざるはなし。子となりてかならず斯く。臣となりては斯くあるべき道は。もとより人にそなはりたることにて。鳥獸も親をしたひ。子をはぐみ。冤牛のこさへ語りつるものを。とこれが樂翁候の孝道觀である。唯、何の理屈もなく親を愛せよといふ、これも結構であるが力が弱い。新しい忠孝の意義は充分自覺したる忠孝でなければならぬ。

□こゝに一人の兵士がある。まことに燃ゆるがやうな忠君愛國の念を持つた良兵士である。所が此の兵士は軍隊に必要な射撃乗馬、行進等の技に甚だ拙い。諸君此の兵士は果して陛下に忠良な軍人

といふ事が出来やうか。果して國家の干城たる良兵士といふ事が出来やうか。

又、こゝに一人の息子がある。親に至つて孝心が深く、從順で實直でまことに、おとなしい息子であるか、惜しい事には働が無い。それが爲めに、家は始終貧乏で、年寄つた兩親は、いつも貧に苦しんで居る。諸君は息子が働が無い爲に、親がどの位難儀をしても、おとなしくて、孝心が深いといふだけで、天晴な孝行息子だと褒める事が出来る。私は、斯ういふ種類の人を、忠義の人といひ、孝行な息子であると褒める事は出来ないと思ふ。一體物事といふものは、念力だけで出来

るものでなく、必ず手腕が入る。内に燃ゆるやうな忠良な念があつたとして、これを發表する手腕が伴はねば、何の役に立つものでない。内に篤い孝心を懷いてゐても、親を安心させる働が無ければ、孝行の目的は達せられぬではないか。

今の善人とは正しい働のある人である。今の忠臣とは、忠義の一念を能く發表する事の出来る手腕を持つた人といふ。軍人ならば、軍人として爲すべき事を爲し得る者が忠義の士である。商人ならば、自己の商業を繁昌さし農夫なれば、最も改良進歩した農作法を以て、有利な農作をするのが忠義の民である。これが親に對しては孝

となる。孝子は皆忠義の士である。

□寒中に笥を掘りにいつたり氷の上に寝たりした二十四孝は舊い孝子である。其の志は感心だが其の行は馬鹿氣である。我等は平素職務に勉強して金を儲けて置いて親の望むに従ふて何でも買ふことが出来る身分になりたい。斯うして本統の孝行が出来るであらう。

第五章 武運長久 (出征軍人慰問)

(一) 出征軍人諸君

海ゆかば みづつくかばね

山ゆかば 草むすかばね

大君の邊にこそゆかめ 願みはせじ

とわれらの祖先が歌ふた忠勇義烈の精神は今やますます千古不磨の光輝を放つて吾忠勇なる軍人諸君は世界文明の爲め東洋平和の爲め美しい義戦の勇士となつて世界の敵たる獨逸と闘ふてゐられ

る。あなた方は實に「秀でては富士の嶽となり、發しては萬朶の櫻
となる」と稱せられた日東男子の精髓であつて、世界人道の爲め東
洋永遠の平和のため君國につくして下さる功績は、六千萬同胞の固
より深く感謝する所であります。氣候風土を異にした山東の地の
此の頃は如何で御座いますか。

彈丸雨飛の中の勞苦は、また一入でありませうがあなた方が家を
忘れ、生命を輕んじてその勞苦を忍んで下さればこそ、我大日本帝國
の天より受けたる此の大使命が果されるのである。明治天皇陛下
の御遺業を大成すべき好機は今である。日清日露の兩大戰役に同

胞十餘萬の流血が培ふた、果實を收穫すべき秋は正に今である。文に
武に、將た實業に大發展大活躍を爲すべき好機は今ぞ來たのである。
大日本帝國が東洋の主權、否世界平和の鍵を握るべき手は今あなた
方によつて延ばされ居るのである。言ふまでもない事であるが何
うかこの心して尙一層の奮勵努力を願います。

(三) 日本武士の典型

額には箭は立つとも背に箭は立てじと、吾稱徳天皇は日本武士の
勇氣を御稱讚になつた。陣に臨んだ死を見ること歸くが如きは是

は日本男子の本領でありまして正義の爲めに大君の命をかしくみ
て、戦場に立つた時、忠魂義膽の外は何物もない。されば建國以來二
千五百餘年、國家一朝事有るに際しては、毎に壯烈鬼神を泣かしむる
勇士が輩出して居る。これを遠い古に求めずとも又殊更に「七た
び人間に生れて國賊を亡ばさん」と言ふた楠公の例を申すまでも
なく、近く日清日露の戦争、或は現に今回の戦役中にあなた方の戦友
が忠勇義烈の行動が之を示して居る。

「丹心報國。一死何辭。與船瘞骨。旅順之陘。」
「玉の緒の絶ても
已まじ敷島の和男兒の義務盡さで。」と詠じて敵彈雨下の中に悠

然敵港閉塞の任務を果し、忠義の鮮血を旅順の海に流した軍神廣瀬
海軍中佐。或は彼の遼陽の戦に、單身劍を提げて向陽子の敵の塹壕
に進んで高地を占領し、一彈二彈を受けても尙屈せず部下を勵まし、
三彈來つて萬事休するや、「今日は八月三十一日、皇太子殿下の御
誕生日だ。此の御芽出度い日に討死するのは此の上もない名譽だ」
と従容として死に就た橋中佐の行動の如きは、實に我等が好個の典
型である。

(三) 偉大なる精神

戦場に於ける勇士の逸話は數限りもないが、さて斯る忠勇なる行動を爲し、斯る壯絶なる最後を遂げ、天晴日本の軍人よと景仰せしむる精神は何によつて得られたのであらうか。只彼の人達の胸中には「陛下」あるばかりである。「國家」あるばかりである。一個人としての廣瀬中佐は彈丸一下すれば粉骨碎身する弱い肉體である。一個人としての橋中佐は矢張り我等と同様に切れば痛いし、丸が中れば死ぬ。而かも「陛下」を仰ぎ「國家」を負ふ精神の胸奥に滿つる時、彼の人達は最早弱い人間ではない。生を越え、死を越えたる雄々しい軍神である。廣瀬中佐でも、橋中佐でも、小さい此の「私」、

弱い此の「我」を偉大な「至尊」偉大な「國家」に捧げて了ふて、はじめて斯る立派な行動が出来た。此の偉大なるものに捧げ盡した時、小さい弱い不安な「私」は偉大な強い堅固なものとなつてゐる。此の境界、これを私共の言葉で「安心立命」といふのであります。

(四) 古武士の信仰

今は昔鎌倉幕府の時、關東武士に勇猛の名を得た甘糟の太郎忠綱と云ふのがあつた。當時盛んに教化を布かれた浄土宗祖法然上人

に深く歸依し、念佛の行をこたひなかつた。建久三年十一月十五日、叡山の悪僧共謀叛の企てあるにより、忠綱は勅命をうけて追討に向ふた。

敵は名に負ふ山門の荒法師、日吉八王寺邊の險に據りて勢を張つて居る。味方は元より勇敢であるとはいへ、勝敗の數元より定らず、生還の程は期すべくもない。忠綱の心は甚だ不安であつた。そこで彼は陣に臨む前に、ひそかに法然上人の許に參じていふ様は、「我等ごとき罪深き者でも彌陀の本願を頼みて念佛せば往生疑ひなき旨、日來御をしへを承はりて、ふかく其旨を存すといへども、それは病の

床に臥て、のどかに臨終せん時の事である武士のならひ、進退心にまかせざれば、山門の堂衆追討のために勅命によりて、只今八王子の城へ向ひ侍り、忠綱武勇の家に生れて、弓箭の道にたづさはる。すゝみては父祖が遺塵をうしなはず。しりぞきては子孫の後榮をのこさぬがために、敵をふせぎ身をすて、而かも往生の素懐を遂げる事が出来ませうか。」とお尋ねをした。其の時、宗祖上人は素樸な武士の告白を聞かれて、直に一宗の安心を叮嚀に御示しになつた。「彌陀の本願は其人の善惡をいはず、修行の長短淺深を問はず、時處諸縁をきらはない。一念彌陀如來の慈悲を喜こぶ時、われらは直ちに安心立

命の地を得る。弓箭の家いへに生れたる人は軍陣ぐんじんにたゝかひて命を失ふともすでに如來にょらいの救濟きうさいを受けた身は戰場せんぢやうすなはち淨土じやうどであつて、われらの手に取る劍けんは彌陀みだの利劍りけんである。我等われらの口に叫ぶ喊聲かんせいは如來にょらいの御聲おんこゑである。我等われらが謀はかりごとをめぐらす心こゝろ、これが直ちに佛ほとけの心である。左様さやうに安心立命あんじんりつめいして思ふがまゝに戰場せんぢやうに馳驅ちきよせよ。と御示おんしめしになつた。忠綱たつなふかく如來にょらいの御慈悲おんじひを感得かんとくして喜び勇んで戰場せんぢやうに向ふた。

あはれ戦利せんりあらずして、八王子やうじの城しろに刀折れ矢盡やつづきて戦死せんしをしたが、彼の身みは最早死はやしを怖るゝ弱小ちやくせうなものではない。一身しんの運命うんめいを如

來らいに任かして力ちからの限り奮闘ふんとうした彼は刀折れ矢盡やつづくるに至りて稱名しょうなの聲こゑと共に忠義ちゆうぎの屍しかばねを戰場せんぢやうに曝さらしたが心こゝろは遙かはるかの淨土じやうどに遊んでゐた。

(五) 眞の勇士

同じく關東くわんとうの荒武者あらかむしやに宇津宮うづみやの彌三郎やみさぶろう頼綱たのつなといふ勇士ゆうしがあつた。家士かishi郎從らうじゆう濟々せいせいとして武藏野むさしのを過ぎ行くに彼の有名いうめいな熊谷くまがひ入道にふだう花はなの若武者わかむしや敦盛あつもりを討つてから人生じんせいの無常むじやうを感じて、法然上人はふねんじやうたんの門もんに投なじた熊谷くまがひが昔馴染むかしなじみの彼かれに出會であつて云ふ様には「いみじく大勢たせいにておはするものかな。但たしいかに多くとも無常むじやうの殺鬼ころしきはふせぎがたく

や侍らん。彌陀如來の本願にて念佛するものをば、惡道におどさず
むかへとり給へば、一人當千のつはものにもなほまさりたるは、これ
念佛なり。かまへて念佛したまへ。」と教へた。

成程熊谷の語のとほりである。いかに多くの勇士に擁せらるゝ
とも、飛んで來る彈丸一つ當れば死んで了はねばならぬ。此の時百
萬の勇士ありとも何うすることも出來ない。此弱小なる「私」を
偉大なる如來に托する者のみ眞に安固の地位に置かるゝのである。
宇津宮は、彼の熊谷の一語が肝に銘じて直ちに道心を發し、熊谷の紹
介によつて法然上人の門に參し、上人門下の高足で、當時法然上人門

下の高足たる西山證空上人を師として立派な行者となつた。未だ
此の教に入らざる時、宇津宮の心には、絶えず不安があつた。濟々た
る郎從堂々たる歩武、これは只表面の「裝はれたる勇氣」であつて
眞の勇氣ではなかつた。口には君の爲め國の爲めを唱へてもそれ
は弓矢取る身の「爲よう事なしの勇氣」であつた。然るに今他力
の道に入つて安心立命した後の彼は眞の勇者であつた。
如來の慈悲を得たる人々の生命は久遠である。往生とは死ぬる
のでなくて、永へに生るゝの謂である。眞の忠義の士彌陀の他力に
歸入したる者のみ七生國に報する久遠の生命を持つて居る。甘糟太

郎忠綱や宇津宮頼綱等は此の實例である。

(六) 阿彌陀佛

他力の信心とは、われらの全心全體を阿彌陀如來に任して了ふといふことである。小さい弱い我々をこのまゝすぼりと偉大な如來の懷の中へ入らして了ふと生活するもいふことである。

されば其の阿彌陀佛とは如何なる佛か古德の仰せに、
光明無量なるが故に阿彌陀と名づけ。壽命無量なるが故に阿彌陀と名く。豎に壽命無量なれば三世に亘りて衆生を攝し横に光明

無量なれば十方に遍じて衆生を度す。所詮攝衆生の願の極る所を阿彌陀と名くるなり。

阿彌陀佛は限りのない光明と生命を持つて居られる佛様といふことである。限りない光明とはどんな光か。それは眼で見たり文字では説明することは出来ないが事實の上で見ることが出来る。あなたが冷たい露營の夢が淋めて、若し故郷の人々を思ふ時どうか家郷の人達の身の上にも幸福を下さるやうに「南無阿彌陀佛」と心の底から念佛をお唱へになれば、あなたの心は言ひ知れぬ安らかさを感せられることであらう。この心即ち佛の光明に觸れて居るので

あつて佛の横に限りなき光明の遍き證據である。

光明遍照十方世界念佛衆生。攝取不捨。

此の光のうちに生活する時、天地共に久遠なる生命のうちに私共は入つてゐるのである。

(七) 陛下の大命、即ち如來の大命

「睡りて一夜を明すも報佛修徳の内に明し。さめて一日を暮すも彌陀内證のうちに暮す。」陛下至仁の御心の發露して大命の下る所、われらの小さい肉體は偉大な國家の干城となる。彌陀大悲のうち

に劍を取つて戰場に立つ時は、われらは常に光明の樂園に遊び山河遠く離れても家郷の妻子と共に光明の中に居り共に久遠の命に生きる。陛下の大命即ち如來の大命陛下の御仁徳即ち如來の慈悲である。何うかおからだを大切に立派に務を果して下さい。無事に御凱旋の日を待つて居ります。(禪林婦人會の需に應じて青島攻圍軍慰問袋に添へて送る)

第六章 人生と宗教

人生と宗教

「人生」といへば、むつかしい哲學上の言葉のやうであるが實は平たくいふと人の生活、日暮しといふことである。

さて人の生活には二つの方面がある。肉體の生活と精神の生活である。元より身心一如、肉と心とは別々に離されるものではないが、肉が主になる時と心が主になる時とあるから、假に二つの方面に分ける事が出来る。そこで肉體の生活とは衣食住に對して勞力す

る生活で、精神の生活とは學問、美術、宗教に對して勞力する生活である。

人間は生命を繋ぐのに、衣食住を求め、爲に骨を折る。衣食住が生活に必要なことはいふまでもないが、人は食ふだけ着るだけ雨露を凌ぐだけでは満足が出来ぬ。よしや、物質上の満足が出来ても、人の欲望といふものは限りがなく、いろいろの方面に向つて進んでゆく。畢竟人は「欲望」といふものがあるが爲に生て居るのである。

欲望

凡そ人間の爲ることは、大抵欲望から出て来る。試にお互が今日一日行ふて来た行爲に就て考へて見れば、食欲を感じて朝飯を食べ、休養を感じて睡眠を取るに至るまで、何事か欲望無しに爲たものがあらう。人事萬般すべて欲望と關係なくして生じたものは無い。さて此の欲望に二種類がある。一に本能的欲望、二に社會的欲望である。更に本能的欲望を生存欲と性欲との二つに分つことが出来る。生存欲とは自己の生存を欲する爲めに欲求する衣食住に對する欲望である。性欲とは自己の種族保存上より生ずる生殖欲戀愛がこれである。

第二の社會的欲望は名譽欲、權力欲、他人の爲に盡さんとする利他欲、財産欲（自己保存の目的以外に有るが上にもあれかしと欲する人々の欲望）、交際欲などであるが、さて畢竟するに欲望なるものに共通の性質は無制限性である。「思ふ事一つ叶へばまた二つ三つ四つ五つむつかしの世や」欲望には限り無く實際の状態に於て到底満足を得らるべきものでないのである。人間の生活には種々の制限がある。人間其者が既に檻の中に入れられた猛獸と同然のものであつて生理的の制限があり、經濟的の制限があり、社會的欲望には道德的制限があり、法律的制限があつて、何人も他人の物を自由に掠め

る事も出来なければ、心の欲するまゝに富は得られぬのである。斯様に人の欲望は無限であつて、實際生活に於ては充たす事が出来ぬ。尤も人に依つては比較的容易に思ふ儘に遂げる事も出来やうが、これは皆暫有的であつて、久遠のものでない。よしや暫有的一時的のものたらずとしても、少しく内省する所あらば、其恃むべからざるを儆なむに至る。

欲望に生きる人間が欲望を充たす事を得ず、其追求に狂うて居る限り、不安の状態は依然として存続する。そこで、此いつまでも果しの無い欲望を追求して見た所で、とても得られさうにもないと気が付

いた時、こゝに外部的に充たさんとしたる欲望は轉じて内部的に充たされようとする。

一體欲望といふものは、どういふ所から起つて来るかといへば、一言にしていへば、「自己を主張する」から起るのである。自己を主張するとは、自己保存及び自己發展を計る事である。自己保存とは現在の自己が其の儘の状態にて存続すること、自己發展とは自己が形を變じて向上的に變化するの義である。保存といふのは、自分の何時までも無くならぬことである。自分の生命、自分の身體、自分の名譽、こんなものが何時までも消えぬやうにと思ふのである。發展

とは更に現象の自己を保存するばかりでなく進んで、モット完全に
なりたい偉人とか神とか佛とかになりたいたいといふ欲望がある。そ
こで欲望は段々大きく高尚になつて来てこゝに「宗教的欲望」と
いふものが起つて来る。つまり宗教は人間の欲望から開かれるの
である。

欲望と佛敎

三毒煩惱に支配されて五欲の爲に奔馳するこれが凡夫の特性で
ある。三毒五欲を斷滅する時こゝに解脱を得べし涅槃を得べしと

小乗佛敎は敎へた。三毒五欲これを一口に言へば欲望である。欲
望は實に生死の原因であつて、此原因が泯亡されない限り解脱は得
られぬものと小乗佛敎は説いたのであつた。故に小乗佛敎は禁欲主
義制欲主義である。

然るに大乘佛敎は寧ろ欲望充實主義とでもいふべき見地に立つ
て居る。煩惱即菩提、生死即涅槃とは欲望が生死の原因であると共
に亦た菩提の原因であると説く。否寧ろ欲望は菩提の要素或は欲
望其者が菩提であるとするのである。欲望が何故に菩提の原因た
るか菩提の要素であるか、將た菩提其者であるか。これは昔から煩

惱即菩提生死即涅槃といふ言葉で現はされて居る。

藝術

人間は昔からの経験によつて、欲望には限りがなく、而かも實際生活にはこれを果し得ないと知つてから外部の物質上の生活から離れて心の生活の上に満足を求めようとする。文學美術哲學などは其の産物である。ゲーテが「生命は短し。されど藝術は久遠也」といふたのは、生命の儂なきを嘆じて久遠を藝術に求めようとした叫である。

さて、藝術の理想は「美」である。我々の世界を美化し理想化しそこに美を求めて満足しようとするのが、藝術が満足をしようとする者の心である。實際の生活といふものは、眞面目でうるさい。そこで畫家や詩人や小説家は、理想の天地を描いて喜ぶのである。しかしながら、藝術の上に現はれた美の世界は、畢竟我等の想像の上の産物であつて、實際には存在せぬ。芝居を見て、吾理想の英雄豪傑と同化した時、自分は英雄豪傑と同化したやうな氣持になつてゐるが、幕を閉づれば、元のツマラヌ自分である。名匠苦心の手になつた畫圖に對しては、神仙の淨境に遊んだ想をするが、一步轉すれば、現在自分

は穢土の此處に遊んでゐるといふことを思へば、誰でも情なくなつて了ふ。

畢竟藝術は我等が人生の紛糾裡から一時の避難場所として求めたまでのことで、其の享る所の快樂は一時のもの、暫くのもので、必しも詩人キーツが歌ふたやうに「永久のよろこび」でないのである。

哲 學

哲學は知識の爲に知識を求め、ものと定義するなら、我等の無限に延びてゆく心の欲望を満足さすための學である。藝術の理想が

美であるなら、哲學の理想は眞である。「生命は短し。されど眞理は久遠也」と詩人ロングフェローは歌ふた。生命の儂なさを覺つて、藝術の美に永久のよろこびを得んとした人が、其の美たるや一時、暫有的のものである事を覺つた時、「眞」こそ久遠の生命なれと教ふるものは哲學者である。

哲學は一言にして云ば眞理の探究を目的とする。藝術の美を喜ぶは主として情の働であるとするれば、哲學の領分は智の世界である。何ういふのが人生の眞であるか。宇宙の本體は何ういふものであるか。斯ういふ問題に頭を悩ますのを普通の人がから見ると無駄

な苦勞であるやうであるが、此苦勞を爲ねば居れぬやうに知識が發達したのが哲學者である。

「人生知を増すは憂の始」である。かくして宇宙人生の眞を求めようとして哲學者は努力する。けれども此の眞理探究の歴史哲學史が世界にあつてから數千年になるが眞理は常に遠い未來に在ると見わたる。哲學史は常に新しい眞理を唱へ出す人が後から〜と出て来る。何時になつたら本統の眞理が出て来るやら何時到達するか解らぬ眞といふものを遙か遠い所に置いてトポ〜と歩む旅人これが哲學者であるまいか。

「日暮れて道遠し」これも一向たよりないものである。

道 徳

徳は得である。品性の習慣を得たものが徳となる。其の徳を外へ現して人の行爲の善惡正邪を判断する標準としたものが道である。故に道徳とは人が相寄つて共同の生活を爲すに當つて社會の安寧個人の權利の擁護など實際生活の上に必要な一定の標準を設けて各人が正若しくは善と認むる所に従はず所の規約である。藝術は想像の世界であつて、現實に力なく、哲學は終に遠い眞理の探究

に力を注いで近い人生を忘れ勝である。「哲學者は一個のパンも造る能はず」といはれ、「哲學の力で齒痛を治す事も出来まい」といはれても仕方がない。人間の生活に最も近く直接實際生活を支配してゐるものは道徳である。

道徳生活とは平たく言へば人間に都合の善い生活である。道徳上の善の理想は人間の進歩に都合の善い事を目的として求むるものである。故に道徳の力は人間の實際生活の範圍内に働く。更に進んで人間本然の要求である自己無限の向上發展は神若くは佛と自己とを結びつける宗教の生活に入らねばならぬ。

第七章 懺悔の花

この人已に毀行す宜しく速かに之れを拔濟すべし。我當に財寶を賜ひ懺悔修福せしむべし。其れをして將來の大苦難を免離することを得せしめん我當に錢財を與へて彼をして佛を供養せしめん若し彼佛に向はずんば罪過終に滅せず。人地に因て跌くも還た扶けて起つを得る如く佛に因りて罪過を獲るも亦佛に因て滅す。(馬鳴菩薩大莊嚴論經)

(一) 懺悔の意義

佛は曾て或る悪人に、「人若し一たび懺悔すれば衆罪は草露の如く消ねん」と説かれた。支那の聖人孔子は「過つて改むるに憚ること勿れ」と言ひ猶太の聖人耶蘇も亦「悔改むる者は天國に生れん」と言はれた。古今東西の宗教道德は悉く懺悔即ち悔改めの爲めに如何なる大罪も悉く消ね悪は變じて善と爲らんとしふ事を説いて居る。現に善悪の心持よりも寧ろ其の行爲を重く見る法律ですら、(宗教及び道德は善悪の心と其の現れた結果の行爲とに干渉するものであるが法律は主として結果だけの行爲を論ずるものだ

と心得て大差は無からう) 改悛の見込ある者は刑期を縮め又自首した者を幾分か減刑する所を以て見ても矢張り他の宗教や道德と同様懺悔を嘉するといふ事が解る。抑何故に斯く宗教や道德や或は法律が悔改めて喜ぶか、これをむつかしく論ずれば際限がないが要するに法律でも道德でも宗教でも人を善に歸すといふ事が目的である以上其の當人が既に自身の罪を自覺した時は善人に歸つて居るので殊に佛敎のやうに心を重んじる宗教は悪を爲すも心である善を爲すも心である、されば之れ迄悪人であつた者も一たび我身の罪惡を自覺して「あゝ悪かつた」といふ一念が起つた刹那既に

悪心は善心に歸つて居るので、過去の悪人は既に善人である、かくて「懺悔すれば衆罪は草露の如く消ねん」といふことになるのである。

懺悔に關する説話は經文中に頗ぶる多いがこゝに最近の實例を一つ挙げて生きた懺悔を知ることゝしよう。

(二二) 兇賊大道虎之助

山口縣厚狹郡の産で大道虎之助といふ者がある、明治四十三年で五十三歳の老人であるが幼少な時から悪事に身を持崩して牢屋の

生活を送ること前後三十年、五十三の春正月早々に北海道は十勝の監獄を出て、今や正路を辿る人間となつて極めて熱心な佛教信者となり、昔と今とは打つて變つた善人となつて居るといふのである。斯様な悪人が如何にして斯様な善人となつたかといふ、其過去に就いては頗る興味のある話を聞いた。次にそれを紹介して見やう、これは東京朝日新聞の記者が親しく彼を訪ふて得たる記事である。

(前畧) 改心はしたといふものゝ過去無殘の生活は蔽はんとし、て蔽ふ能はず、打ち見たる所顔は日に焦けて淺黒く五十三歳と言ふ彼は、髪を短く刈込んで髪は七歩の霜を交へ聊か薄く禿げ上つ

てギロリと光る兩眼の鋭さ話がハッンで氣の引き立つ時には満
面紅を漲らして、凄氣人に迫る小柄ではあるが全體が頑丈の構造
淺黄木綿の單衣に色の褪めた黒木綿の羽織を重ねて端然と座つ
て居るが、往年持兇器強盜數十犯破獄逃走かすを知らずといふ兇
暴の時代を見れば一層の凄じさを覺ゆる、更に驚いたのは彼れが
全身傷だらけのことであつた眉間に一ヶ所右頬に一ヶ所左
の掌兩の手首兩足の甲脊胸腹にかけて一面に斬傷突傷の痕があ
る、眉間に頬胸腹脊にかけての傷は破獄逃走の際看守劔で斬られ
たもの、又は逮捕の上監獄に送り還された時にやられたもの、手首

の創痕は捕繩の喰ひ込んだもの、兩足の甲の傷は在獄中度々獄則
に背いて減食閉禁を命せられて板敷の上に毎日十二時間づゝ座
り詰にされたので、脹れて腐れた迹だと言ふ、十六歳の時に窃盜の
味を覺わてより、今日に至る三十七年の間に漸次膽も太くなつて
強盜もした、強姦もした人も殺しかけた、獄中の生活を三十年もし
て、今日娑婆に出られやうとは夢にも思ひませんでした、彼は彼の
眞情、これも偏に

神佛の加護の然らしむる所、神や佛の力でなくては再犯以上の
の者は到底眞人間にはなれませんが、彼れは斷乎として言ひ放つ、

彼れは一昨年さきねんの初夏はつなに二夜ふたよ迄も不思議ふしぎな靈夢れいむに感じ入いつて深く佛法ぶつぽうに歸依きねした獄中ごくちゆうに在りては東本願寺派ひがしほんがんじはの中澤教誨師なかざわけうゐしの訓誨くんゐを受け出獄しゅつごく後は一度札幌さつぼうなる本願寺ほんがんじに參詣さんぎして來たといふが私わたくしは千四百圓せんよひやくえんも懐ふところにした事ことがありましたありましたが今日こんにちは無一文むいもんでありまますが此御佛このみほとけの懐ふところに救すくはれたといふ感じかんを以もつて居ゐる程ほど楽しいことことはありませんといふ懐中くわいちゆうには南無阿彌陀佛なむあみだぶつ六字むじの名號なごうを收たくめて手てには珠數じゆず側がはの小風呂敷こふうろしきの中なかには二卷にわんの觀音經くわんのんきやうを包つんで居ゐる。何なんといふ殊勝じゆしやうな言葉ことばであらう。「再犯さいはん以上の者ものは眞人間まにんげんには成なれる者ものではないが私わたくしが斯かうして眞人間まにんげんに成なつたのは偏ひとへに神かみか佛ほとけの力ちからだ」

といふ此信仰このしんかうが誠まことに彼かれを助たすけて正道せいだうを踐ふます力ちからとなつてゐるので一夜や靈夢れいむに感じかんじて深く佛法ぶつぽうに歸依きねしたといふ其そのの靈夢れいむは何なんたるかは知らぬが思おもふに彼かれの善心ぜんしんが内うちに萌もして本もとに還かへれといふ佛性ぶつじやうの叫まびであつたに相違さかない。

強盜きやうたうの罪つみを以もつて二十三歳さんじゆうさいで三池集治監みいけしゆぢかんに投なげられたが脱獄だつごくをしして其都度捕そのつどはれ、二十七年にじゅうしちねんには海路北海道かいろほくかいだうに送たげられて登志別としべつにも居ゐた、二十九年にじゅうきゅうねんに十勝監獄じゆしやうかんごくに移うつされたが端はしなくも彼かれは茲こゝに殘忍ざんにんきはまる一大慘劇だいつあんげきを演出えんしゆつするに至いたつたのである。

（三） 慘劇

怨重なる看守長 此處に彼は思ふ様身には無期徒刑の上に更に十五年の懲役を課せられてある所詮娑婆の風に吹かれる機会もないが、毎日々々寒風炎天に曝されて苦役に就くは馬鹿々々しい、一層假病を構へて分房に棲むの快なるに如かずと斯て彼は圖々しくも忽僞狂人となつた、けれ共看守も看守長も容易に信せない其太々しい根性骨を挫いて遣らんと、夫れよりはあらゆる折檻或時は朝から晩まで板敷の上眞正面向いて座り詰め看守は一時間交代で監視して、眉毛一本でも動かすが最後、打つ蹴る叩く

散々な目に遇はず、或時は嚴寒中騰せを下げる爲とて、厚さ一尺もある氷を碎いて其の中に打ち込れた、仕様がなないと觀念してジイツと我慢をして居ると、横着だと言つて更に頭迄突込まれる、減食にも度々遇つた、一度ならず二度ならず、毎日の様に責めさいなみエツ糞ツと憤激して彼れは竊に恐ろしい企みをした。

斷鎖の用意 餘りと言へば無法な扱ひ、ヨシ去らば大道一命を抛つて看守長一族を誅滅し全國の監獄の見せしめにして呉れんと徐ろに機會の熟するを待つて居た、忘れもせぬ四十一年四月十一日、彼は平生の如く同房の囚徒の一人と脚に鐵鎖を附せられて

勞役に出た勞役と云ふのは薪片付で其日は生憎看守長の姿は見
ななかつたが其官舎は遂目と鼻の間にある折よくば薪割用の大
斧を揮つて一家を塵にせんと先づ第一に邪魔になる鐵鎖を斷つ
用意として三ヶ所の切株の上に一尺程の石を載せて置いた所が
何時も其石は知らぬ間に取り去られる且は到底容易に斧の側に
寄られさうもないので彼は第二の策を案じた夫れは重い物を荷
ふコロで七尺許りもある太い棍棒これ屈竟の獲物と先づ人知れ
ず夫に近づいた。

鮮血の海 彼れの心では無残ながら今日の看守三人の中の一

人を犠牲として其帶劍を奪ひ鐵鎖を斷つて看守長の官舎に躍り
込まんとするにあつた機會は遂に熟した神ならぬ身の細川看守
は何氣なく後に向く伺ひ寄つた虎之助こゝぞと棍棒取るより早
く渾身の力を籠めて發矢と打ち下す何かは以て溜るべき看守は
ウームと悶絶する折重なつた大道は直に其帶劍を奪はんとすれ
ど倒れても流石に職務を忘れず遣らじと争ふ必死の力組んづほ
ぐれつ揉み合つたが大道の力や勝りけん劍は半ば抜けかけたが
抜く時彼は左の掌をズラリと斬つた今は片手の大道看守はムク
リと跳ね起きて逃げ出したが忽ち行き詰る堀と塀直様身を翻し

て拔劍の儘躍りかゝる。大道も棍棒を以て渡り合ふ。咄嗟の悲劇に
聲さへ互に出せなかつたが、漸く騒ぎを見付けて他の一看守拔劍
を振つて飛鳥の如く走り寄る。失策たりと大道、薪の間に身を隠す
間もあらせず、「野郎」と一聲紫電閃めいて虎之助が頭は打ち割
られ、唐紅の血汐は邊りの草を染めた。

(四)

神の如き看守 看守も倒れた。大道も倒れた。監獄内の大騒とな
つて典獄以下悉く現場に駆け付たが、不取敢二人は醫務室に擔ぎ

込まれた。當時大道は正氣を失つて居たが、看守は尙話しも出来て
「私の傷は浅い。大道の方より先に療治下さい」と嘆願する。數日
の後大道は僅に正氣づいたが、其際教誨師より以上の話を聞いて、
鬼の眼にもホロ／＼と熱い涙。後年彼れが悔改の第一動機は、此神
の如き看守の一言に萌したのである。

佛は法句經に説かれるやう「怨に報ひば怨何時か解けん、たい恨
無くし慈悲に依りてのみ解くを得べし之れ其の自然なり」と説れ
た。悪むべき囚人のために重傷を負ひながら、吾が傷は輕ければ彼
より先に療治せよといふ實に此の一語は神佛の語である。悪人大道

虎之助が改悔遷善の第一動機は實に此の看守の慈悲の心より出た眞心であつた。

一度看守の情に泣いた彼も、思へば果敢なき我が身の上、無期徒刑の罪は三十一年の大赦に遇ひ、四十三年には出獄される筈であつたが、一旦心の狂ひより彼の慘劇を敢てしたエ、もう儘よと捨鉢の彼れ、當年取つて五十一歳此上有期徒刑の十五年も喰ひ込んだら到底満足に娑婆に出られる身ではない、よしさらば獄内にあつて思ふ存分の亂暴狼籍を働いて太く短く世を過さんと凄じい決心、晝はひねもす夜は夜もすがら、悪心全身に満ち切つて身體の

中は燃ゆるやうであつた。

南柯の一夢 思ひ起す同年五月廿六日彼れは住み慣れし監獄の門を出て久方振に故郷へと志した、夫れも父母の家には流石に面目なくて歸られぬ、一里隔てし叔父を尋ねて身を寄せんと田舎道の夕闇を縫て辿り着いたが内は七八人の家族が夕飯の最中、叔父は自分の姿を見るなり「オ、虎か久し振りじやつた、併し若しお前の歸つたことが近所に知れると、又々交際が出来なくなる何卒其儘直に歸つてと、取付く島もない素氣なき見慕餘りと思へど詮方泣く泣く元來し道へと引返さんとすれば、流石叔母は女性の

身「マア〜」と叔父を宥めて夜の明けぬ中に立つて行くやうにと、兎に角に座敷に招じた思へば思へば腹の立つ叔父の振舞、三十年振に歸つたのに優しい言葉一つかけず出て行けがしの待遇は何たる無残の心であらう。

水晶の珠數 去ねとならば去にもしよう、去乍ら只は歸らぬ行懸の駄賃に手廻りの物を搔拂つて逃げ出さうと座敷の中を屹と睨め廻せば、長押に掛けた衣物左の袂が膨らんで居る、伺ひ寄つて觸つて見ると中々重い仕済ましたりと出そうとすると容易に出ない、袖引破つて出して見ると立派な手提鞆、此中にこそと早速錠

前捻切つて開いて見ると鑰錢が一杯案に相違して一度は沮喪したたが其下を搜つて見ると水晶の珠數が出た「何だ詰らん」と又搜ると又出る、斯くする事前後三回餘りの不思議に霎時茫然として考へ込むと枕元に看護婦の聲「大道さん、大道さん」ハツと驚いて眼を覺せば、是れ南柯の一夢、獄窓の外は五月雨の雲低く垂れて杜鵑一聲南に啼いて飛んだ。

南無阿彌陀佛 翌夜も彼は又夢に襲はれた、五十年の生涯悪事に染切つた身の又しても持兇器竊盜故郷近くのさる富豪の邸に首尾よく忍び入つて一尺程雨戸を切り抜くと鼻の先に一條の綱

が下つて居る網を辿つて見上ると上には一羽の鷹が止つて居る、
好き獲物御座んなれと網を手繰つて引寄せやうとするどバタバ
タ動いて容易に手元に落ちて來たり漸くのことで手捕にしよう
とするど鷹は村の山寺を一目散己れやれ逃してなるものかど一
心に追ひ駆けるどやがて鷹は山門の上止る表には早チラホラ
人の影も見ねるので急いで鷹を捕へやうとすれば、今度は勢ひ鋭
く本堂の中に飛び入り網を握つた彼はズル／＼と堂の中へと引
き入れられた、是は不思議と見定めれば幾百年の風霜に寂び果た
る伽藍の奥燈明幽かにして老僧が讀經の聲、南無阿彌陀佛。

不可思議なる二夜の夢は彼の心を入れ更へた以前多少基督教を
調べてゐた彼れは聖書を捨て、佛書に親しんだ親しめば親しむ程
彌陀の御尊とさ難有さ彼れの光明界に復活した。

第八章 古塔の文字 (青年講話)

希臘の國のある古い寺に昔から傳はつてゐる大きな石の塔がある、其の塔の表面にこんな文句が彫りつけてある、

我は一切の者の過去、現在、未來なり。

果敢なき智慧と生命とを有てる人間は、未だ嘗て我が廣大不思議の正體を覆へる面帕を取り去りたること無し。

といふのである。まことに過去、現在、未來は我等の果敢ない智慧ではトテモ知る事が出来ぬ不思議な怪物である、謎である。

我身は何處から何うして此の世に生れて來たのであらう？ 四生萬類數ある中に如何なる宿縁あつてか受け難い人身を受け得たか。世は様々、人様々の此の世である。人間と生れた事は嬉しいが、見れば富貴榮華に月日を送つて家内仲睦まじく暮す人もあるに、我身は賤しい貧しい身と生れて悲しい辛い事ばかりに袖の涙を乾す間も無いといふのは如何なる前世の惡業であらうか？ いや、上を見れば果しも無いが下を見れば未だく自分より憐れな不仕合な人も多い、斯ういふ好い世の中に生れて不充ながら朝夕の活計に事缺かぬ身の上を生れたとは誠に有り難い事である、さて何

として這箇有り難い身分と生れたかと善いにつけ悪いにつけて、少しく我身の上を振り返つて見れば、直ぐ思ふべきのは我が前の世である。過去である、而かも過去は不思議な怪物である、謎である、我等の智慧では其の面帕を剣いで正體を見現す事は出来まい。

過去は過去として其のまゝ捨て、置くも宜からう、しかし現在の我身が解らぬのには困る、然るに解つて居るべき筈の我身が一向に解つて居らぬ。昔支那に移轉をした時に妻を置忘れた者があつたのを孔子様が御聞きになつて、妻を忘れるのは未だよいが、我身を忘れる者があるではないかと言はれたさうだが、我々は現在我身の何

たるを忘れて居る無常な者を常なりと思ひ、苦なる我身を樂と思ひ、空なるべきを有と着する所謂の四顛倒の迷は我と我身の正體が解らぬからである。

之を知らせたさに太古の哲學者は「汝自身を知れ」と叫び、自力禪門の教は、「自己の見性」を以て宗旨の眼目とした。しかし下根下劣の我等は尙自身を知る事が出来ないのである。過去が不思議の怪物であるよりも現在の我身は更に譯の解らぬ大怪物である。それでは未來は何うかといへば、孔子様でさへ「未だ生を知らず、焉んぞ死を知らんや」と言はれたが今の我身が解らぬやうでは、と

ても未來は覺束ないがさて覺束ないでは濟まされぬ。
諸君は今の我身の生活を此上もない楽しい生活と思はれるか、諸君は今の我身を此上もない果敢ないものと思はれるか、若し此上もない楽しい者と思はれるなら、千代八千代までも此の樂しみの長かれと思はれるであらう、若し此上もない苦しいものと思はれるなら、末には花咲く春があると、思はねば、とても辛くて本意なくて、さみしくて、月日が送られぬ。楽しいにしる、苦しいにしる、人に未來といふものがなくては、現在が心安く送れない、然るに此の現在の生活を支配する未來が、苦か樂か解らぬとあつては何とする。

斯う考へて來るとジツとしては居られぬ。直ちに不思議の正體を隠して居る面帕を取り除けて、過去、現在、未來の正體が何うかを見届けて遣らねばならぬが、「人間は未だ嘗て取り去りたることなし」と塔の文句にあるやうに、其の正體は人間には解らない、哲學も氣張つてゐる、科學も骨を折つてゐる、學問の研究といふのは此の研究である所が、情ない事には、ゲーテといふ詩人が

只これ研究し得るのみ。

人間の能力は理解力の範圍内に働く

と歎いたやうに、一と一とでことなると解る我等の理解力では此の

怪物は研究は出来るが解るまい。
唯「信」である。「信仰」である。宗教生活の妙味は直下に會するに在り。この信のみ彼の希臘古塔の文句を消すことを得る

第九章 惡魔降伏

(一) 惡魔

雲は徂き風は起り日は明かに月は皎く星は羅々として列つて我世界を包むこれを我等は宇宙と呼ぶ海は洋々たる物である山は巍々として聳ゆる物である花は咲く物鳥は歌ふものこれが我世界の常であるとして怪しまぬが混沌の世界から忽然として生れた我等の祖先なる太古の民は如何に驚異の眼を以つてこれを見たであらう輝やくものは何ぞ鳴る物は何ぞ我前に聳ゆる物は何ぞ我後に揺ぐものは何ぞと森羅萬象悉く彼等を驚意せしめぬ物は無かつた。

又我等は山をも崩し水をもふせぎ石を割き木を抜き風を吸ひ電氣
を使役し此大なる自然界の大部分を征服して萬物の長を以つて誇
つて居るが彼等太古の人々は尙自然の力を量りかねて之れを畏れ
是れを崇拜して居たのである。是等の外界の事象に驚いた彼等に
對して、さらに不思議なるは我身である我内面の心の働である我等
は斯くも思ひ斯く判断し感じ決定する作用あるが「心」なりなど
賢くも知つてゐるが彼等にありては斯く樂しきは何故ぞ斯く
悲しきは何者の力ぞと斷じかね我内面の働であることも知らずし
て他に何者か斯く爲さしむる力がある者と考へたのである。斯く

て彼等は外界を怪しみ内面を怪しみ果ては是れを究める能はずし
て自然の力の我を喜ばすものを善神といひ我を苦ます力を悪魔と
した。外界の力に神と魔の有ることを認めた彼等は同様に内心快
く樂しく明かなる神の力に依ると思ひ悲しく苦しく冥きを魔の力
なりと考へた悪魔なるものは是の如くにして我世に生れ來り衷に
感じたるものを外に現はし之れを具體化する事を好む人間の爲に、
種々の異形に描かれたのである。

(三)

悪魔の意義

名は實を詮すといへば悪魔の實質を尋ねる爲に先づ其の悪魔といふ語義に就て考へて見たい。所が此の語は二種の語原から出て來て居る、一は希伯來語のセタン、(Satan) から來て居るので、此語は敵 (Enemy) 人間の敵手といふ義であると註されて居る、此語で現はされて居るのは彼の基督教でいふ悪魔で、近くミルトンの『失樂園』に歌はれたエデンの園でイーヴを誘惑して神より禁せられた智慧の果を食はしめ、人間に苦痛と邪惡を與へた大魔王サタンが其れである。第二は佛教でいふ魔即ち梵語の魔破句 (Marapapyan) である、此處に二語を調べて佛耶兩教の悪魔を研究して見ると同じく

悪魔の思想にも相違があり、又兩教で説く悪魔の思想を比較するだけでも二つの宗教の思想に根本的の相違があることが分つて頗る面白いのであるが、今は暫く措いて先佛教の悪魔に就いて一つ二つ書いて見やう。

佛教でいふ魔とは梵語で、これを詳しくいふと魔破句或は魔羅婆卑椽だといふことになつてゐる。魔破句は本統はマールラ、パピヤン (Marapapyan) だから魔破句では原音が出ないが、實は御經を翻譯した時には魔破句と書かれたものであつたのを後世の中の日を日に寫し誤つて其儘に傳つてゐるのだといふことである、旬は日本の

字書にもケンと音がしてあつて支那の字引を引いて見ると旬は音
縣(去聲)也とある縣の去聲ならばヒヤンであるから破旬即ち原
音のバビヤンに近き音となる。破旬でも破旬でも孰でも宜いとし
て其の字義は何うかといふと破旬は惡者魔は能殺と翻じてある即
ち人を殺す惡者の義である。「涅槃經」の純陀品に四魔を説いて
曰く

譬ば人王に大力士あり其力千に當りて更に降伏の者を餘す有る
なし故に力士を一人當千と稱す(乃至)如來も亦煩惱魔陰魔天
魔死魔を降す是故に如來を三界の尊と名く。

煩惱魔陰魔天魔死魔これを四魔といふ煩惱魔とは吾人の精神を煩
し惱ます心をいひ陰は蘊にして此の煩惱にて作せる行爲の集合せ
る結果である是に因りて成れる吾人の身心に因りて吾人は輪廻の
業を成すが故に魔といふ天魔とは吾人が生天の爲に修する善業を
障碍する誘惑死魔とは智度論に解釋して「死魔とは實に能く命を
奪ふ」と即ち吾人の眼前に迫る死を指すものである故に四魔とい
ふも實は魔に四種あるといふのではなくて魔を四方面より解釋し
たもの即ち吾人の精神を惱し苦ます精神状態を四方面より解釋し
たるものである止觀の輔行に此四魔の外に苦空無常無我が四を加

へて八魔を擧げ或は釋尊成道の際畢波羅樹下を襲ふた十魔の如き、
いづれも吾人の心的煩悶誘惑等を示すに外ならぬ故佛教でいふ悪
魔なるものは一言にして之れを言へば吾人が正しき生活に達せん
とするに對し是を邪路に引き吾人が菩提に達し得る智慧を奪ひ去
らんとする種々の誘惑と邪念とを指すに外ならぬのである、されば
此の邪念を拂ひ誘惑に打克つことを得ば吾人は常に正しき生活を
爲し理想に達することが出来る斯くして邪念と誘惑とに打克つこ
とが出来た時これを悟といふ。故に降魔は佛教の最後の目的に達
する手段である。

(三三) 降魔

今を去る凡そ二千五百年の昔人間至高の王位に即くべき光榮を
捨て、最愛の妻子を捨て、苦行林に入りたる太子悉達は尼連禪河
の邊畢波羅樹下に座して如何にもして真正解脱の道に向はんと座
禪冥想せられたが解脱の道は得られんともせぬ。

浮世を餘所の此の林にも春は花に匂ひ秋は虫が集く仰ひでは千
里を照すといふ月に觀念の想はいつしか望郷の念に擾され俯して
は禪河の水は緩く流れて温かき水の匂は此の若き行者の心を誘は
んとする解脱の道の得られ難きにつけても屢々起り來る妄念雜慮

は何ぞ、これ實に解脱の道を障へ慧命を奪はんとする魔軍である。而かも太子は遂に此魔軍と戦ふて打ち克たれた。悪魔は實に凡聖の境に設けられた關門であつて、降魔は此難關を打破る手段であつた。悉多太子は今や此の難關を打破りて凡界より聖界に入つて釋迦牟尼佛となられたのである。我等の世界は迷界である。聖者の境界は悟の境界である。而かも此の悟の境界にも尙悪魔は屢々迫り來つて再び迷界に陥れんとする。これと戦ふのが悟後の修行である。釋尊も亦た屢々これを經驗された。

是の如く我聞く、一時佛鬱鞞羅聚落尼連禪河の側に住し菩提樹下に成佛して未だ久しからず、時に魔破旬是の念を作さく、沙門瞿曇鬱鞞羅聚落尼連禪河の側に住し菩提樹下に成佛して未だ久しからず、我當に彼に往きて留難を爲すべしと、則ち化して年少の沙門となり佛前に往きて偈を説きて言く

獨入一空處。禪思靜思惟。已捨國財寶於此復求何。若求聚落、利。何不習近人。既不習近人。終竟何所得。

と大悟徹底して得る所は何であらう、曰く無功德、あゝ我は無功德無所得の爲めに努力して何かせん、寧ろ痴人の夢を追はんよりは去て世間有利の事に隨はんといふが如き一念子の胸底に浮ぶ時、これ釋

尊の眼前に迫れると同一の魔が襲來したのである。

佛復た偈を説いて答て言く、

非魔所制處。來問度彼岸。我則以正答。令彼得涅槃。時得不遊逸。不隨魔自在。

無所得のうちに所得あり、人若し解脱を得れば世の放縱なる生活を脱し、あらゆる罪惡の誘惑を去り苦痛に打ち克ち、大悟の生活を爲し得べし。これに過ぎたる大所得あらんやと、これ釋尊が降魔の一喝であつた。

魔復た偈を説いて言く、

有石似凝膏。飛鳥欲來食。竟不得其味。損耆還歸空。我今亦

如彼。徒勞歸天空。縮副增一阿含三十九四左

と紛々たる世間塵勞の惡魔に一喝を與へて大理石を啄ばまんとして却つて耆を損じて空々しく天空に歸る鳥の如き醜態を露出せしむること、眞個求道の士の面目とすべき所であらう。

(四) 降魔の態度

釋尊が降魔の態度は堂々たるものであつた。

一時佛王舍城耆闍崛山中に住す、爾時世尊夜闍の時に於て天に小

微雨あり、電光炎現す。房を出で、經行したまふ。時に魔波旬是の念を作さく、今沙門瞿曇王舍城耆闍崛山中夜闍に住し、微雨ありて電光炎現す。房を出で、經行せり。我今當に往きて留難を爲すべしと、大團石を執りて、兩手調持し、佛前に至りて碎きて、微塵と成す。爾の時世尊是の念を作さく、惡魔破旬燒亂を作さんと欲すと、即ち偈を説て言く、
若耆闍崛山。於我前令碎。於佛等解脫。不能動一毛。假令四海、
内。一切諸山地。放逸之親族。令其破成塵。亦不能傾動。如來、
一毛髮。

魔破旬是の念を作さく、沙門瞿曇已に我心を知ると内に憂感して

即ち没し現せず。

實に愉快極まる堂々たる態度ではないか、百雷が鞞鞞と響いて一時に我前に落ち、大理石を壊ちて微塵とする中に立つて一毛髮も動かさぬ。其の雄々しさよ、斯の如き眞正解脫の聖者の前には、死の怖れも世の浮苦勞も物の數かは、それ等の惡魔は遁げ失せて影も無い。吾佛敎の降魔は斯の如く堂々たるものである。而かも我等は此惡魔を驅馳するばかりで了るべきでない、煩惱即菩提の家には魔を下して直ちに我菩提の資とせねばならぬ。菩薩未だ成佛せざる時菩提を以て煩惱と爲す、菩薩成佛の時は煩惱を以て菩提と爲す。(仁王經)

悟らぬ前こそ悪魔もあれ悟れば、佛魔同體である。「田の草を取つて踏み込む肥料かな」。斯ういふ所は佛教獨特の態度であらう。

(四) 降魔法

善男子、譬へば偷狗の夜人舎に入るに、其の家婢使僕若し覺知せば、即ち驅罵すべし、汝疾く出で去れ、若し出でざれば、當に汝が命を斷つべしと、偷狗之を聞いて、即ち去りて還らざるが如し、汝等今より亦た應に是の如く、破旬を降伏して、是の言を作すべし、波旬、汝今是の如き像を作さざるべし、若し故に作さば、當に五繫を以て汝を繫

縛すべし、魔是れを聞き已つて、便ち當に還り去ること、彼の偷狗の更に復た還らざるが如くなるべし、(涅槃經)

五繫の法とは、悪魔を繫る五種の方法である。一言にしていへば、我心に起り來る種々の魔を、佛道修行を以て縛るのである、野良犬の如く、野盜の如く、日々夜々に吾心中に入り來る悪魔を、佛道修行に依りて悉く縛り上げて、我奴隸とする、斯の如くして、太古の昔より我等を苦しめ惱めし悪魔は、遂に我手に征服されて了ふのである。

第十章 夢の生活

(一) 夢

夢と思へば何でもないが、そこが凡夫でねわあなた。これは某の藝人がうたつたものだといふが面白い。人生五十年、其生涯の行動が夢と思へば何でもないが、夢と思へぬ所に味がある。

人生夢の如しとは、東洋人が古くから懐いて居る思想で、佛教の中にも、夢幻泡沫に事寄せて人生の迷を説破した經文は頗る多く、本生譚の中にも佛弟子が夢によつて其妻女を教化したといふ面白いもの

のがたりもある。

枕上片時春夢中 行盡江南數千里

名譽を逐ひ、利欲に奔りて、萬里に往返するもの、豈必しも枕上片時の春夢中のみならんや。曠大劫來、人生の事、一事一物、分時寸刻も夢中にあらずといふことなき有様である。

しかし、人生を夢と見るのは華想的な人生觀で、人生其者は決して夢でない。いや、夢のやうな生活をして居る者には、人生は夢でもあらうが、覺めたるものには、夢ではない。

(二二) 盧生一炊の夢

謠曲『邯鄲』などにうたふた盧生の夢とは沈既濟が『枕中の記』
にいはいはく、

開元七年道士呂翁といふ者神仙の術を得たり。邯鄲の道中を行
くに茶店に息ふて坐す。小年盧生といふ者あり短褐を衣て青き
駒に乗りて亦た此所に來る。翁と相語る。盧生自ら其衣裝の破
れて見苦しきを顧み乃ち嘆じて曰く大丈夫世に生れて窮乏する
こと是の如しと即ち翁に語りていふ、『吾れ常に學に志す自ら大
志の遂ぐべしとなす。然るに今已に壯を過ぐ猶志成らずして困

窮す』と言終つて睡らんとす時に主人方に黍を蒸す翁乃ち自己
所有の枕を取つて以て之に授けて曰子吾が枕に枕せば當に子を
して榮華自適志の如くなるべしと盧生即ち之に就いて眠る忽ち
にして其家に歸る數月にして清河の崔氏が女を娶る女容せ甚だ
美しく性質愈厚し進士(官位)に擧げられて登第す釋褐(舊衣)
を釋きて官服を着けること昇級登位の場合に用ふ)して淮南の
尉に轉す俄に監察御史に遷り起居舍人知制誥に轉す三年にして
出でて同州を典どり狹牧に遷り節を鞭州に移し河南道の採訪使
を領す徵されて京兆の尹となる是歲方さに戍狄に事あり御史中

丞河南道の節度に除せらる。大に成虜を破り朝に歸つて勳を冊し、恩禮極めて盛んなり。吏部侍郎に轉じ戸部尙書兼御史大夫に遷る。時の宰相の爲めに忌まれて飛語を放ちて之を中傷す。端州の刺史に貶せられ三年にして徵されて常侍に爲る。未だ幾ばくならずし、同中書門下平章事になる。同列復た邊相と結んで不軌を圖るとなし。制獄に下さる。中官爲めに之を保して死を減じて驩州に投ず。數年して帝冤を知つて復進んで中書令と爲り封せられて燕の國主となる。五子を生み孫十餘人有り。年八十を逾へて病んで死す。盧生欠伸して寤むれば其の身方に茶店に眠り呂翁傍に在り主人黍

を蒸して未だ熟せざるを見る云云。

即ち黍の一炊中に官位に上つたり下つたり、八十に至りて死するまでのことすべてこれ夢であつたのだ。自覺なく夢みるやうな生涯を送る人の一生は亦此の夢のやうなものである。

(三) 達人の達觀

俗息紛々たる徳川三代將軍の頃に出で、最も徳川氏の歸依を受け、後人の傳稱して忘れざる澤庵和尚は、正保二年十二月病革まれる時自ら「諸方は末期の句を唱ふ、然れ共山僧は口を杜いて去らん」

と從容として世を去らんとす時に門人頻りに遺偈を乞ふて止まぬので「夢」といふ一字の書して筆を抛つて坐化せられた。

一生美はしい些の濁もない生涯を送つて眞個の禪僧とはこんなものぞと示された空のやうな禪師の一生も竟に夢であつた。達人の達觀あゝ露と起き露と消ねぬる人の世や難波のことは夢の又夢。

(四) 生理學上の夢

昔から夢ほど譯の解らぬ物は無いとしてある。錯雜したこゝ意外の事前後の合はぬ事を「夢に夢みる心地」「夢路を辿る」など形

容してある、されば古科學思想の幼稚な時代は此の不可思議世界をこの世以外に必ずありとして、それから種々の迷信を生じ夢判斷だとか夢占だとか夢想の傳授などゝいろゝな事が傳へられてある、ところが近世に至つて生理學が進歩し、これと共に心理學は開托せられ心身の關係が明瞭と分るやうになつて、夢に對する正確な解釋を與へられた。これを説明するにはいろゝゝむつかしいさうなことを言はねばならぬが、ザツと言へば、人が晝間活動して居る間は、すべて機關が活潑であるが、睡眠して居ると皆鈍くなる、そこで晝間起きて居る間にいろゝゝな外界の刺戟を受け、心的作用を起したのが、

睡眠すると同時に外界は全く閉ざれて了ひ、脳は勝手次第に働き出す。そして、すべての人の脳髓には、一たび何事かを感ずると、すぐ一の記憶が残る。其の記憶が錯雑混合して、アチラの事やらコチラの事、さては、不可思議の夢を見る。又枕上の時計の音が小鳥の歌に聞いたり、小鳥の歌が耳に聞えて花を見るなど、いふやうなこともあるさうな。

(五)

人生夢にあらず

自分の生活を静観して見て、無明の夢路から覺め得た人の生涯は、

決して夢でない。自覺ある人の生涯は決して夢でない。

佛教は人生は夢の如しといふ。しかし如しといふのは人生其者が夢であるといふのでなくて、夢のやうだと思ふてすべての執着を離れて自覺ある眞摯な生活をせよとの教であるといふことを忘れてはならぬ。

第十一章 病牀の慰め

(其二)

□ 何か病牀の慰めになるやうな事柄を書いて送れとの事久しい間の御病臥で、さぞお厭な事でございませう。身體のたつしやな心配の無い時は花の色香も美しい鳥の啼く音も面白い。しかしどうも病氣になるといふと花を見るのも面倒だし鳥の聲さへ騒々しいものです。

□ 私去る年の春身體が少し悪くて困つてゐた折柄精神の上にも

或る患があつて、讀書思索を抛つて了つて、好まぬ酒に鬱を遣つてゐた事がありました。その時旅の宿に眠られぬまゝに友人に手紙を書いた端へ、こんな詩のやうなものを書いてみました。「可憐病客心轉迷。山院春寒陰復晴。塵榻展書難久讀。青袍今已誤人生。」其の後友は、あんなものは詩になつてゐやしない、第一平仄があやしいぢやないかと笑ひました。詩になつてゐないかは知らないが、私の思は實際この通りでした。

□ 御存じの通り私は學校を出て、少しく大きな希望や抱負を持って、これから大に爲すあらうといふ矢先師跡の山寺へ呼び返されて寺の

務の忙しいのと、生活の苦しさに思ふやうな勉強も出来ず、不平で不平で堪らなかつた。私の友人の或者は我々修學の徒の一種の理想とする「洋行」をして彼國の趣き異なる人情風俗や、學校の風俗などを知らせて来て、早く来いと申します。私の同窓の或る者は學校にゐた當時から續けてゐた研究を發表して立派な著述をいたしました。そんな手紙に接したり、そんな著述を新聞の廣告で見ると、友人の幸福を喜ぶといふよりも、自分の境遇を悲しむ苦痛が先に起るのが常でありました。

□ 不平やら煩悶やらは、どうも私を盃と親しませ、三絃の音に耳を

傾けさせるやうにしました。酒は元より私の好む所ではない。私の趣味は元來俗悪な三絃の音を喜ぶのでありませんでした。謂は、不平と煩悶の遣る瀬なさに多少自暴氣味でもあつたのでせう。外部の忠告やら、内心の自覺と共に斯ういふ事がつくづくツマラナイと氣の附いた時、私は病氣になつてゐました。

□ 速水といふお醫者さんが私を診察して呉れた時は三十七度四分の熱で私は牀に就いてゐました。速水さんは叮嚀に私を診察して黙つて何も言つて呉れません。私がだん／＼問ふた揚句「言つても關ひませんか」と前提して言ひ難さうに、「あなたは肺浸潤だ」

と言ひました。

□それぢや私は肺病なのかと思ひましたが私は格別怖ろしいとも悲しいとも思ひませんでした。私は強烈な生の欲求者である。生命の長からん事を勿論心から希求して居て精神的に肉體的に活力の擴充を人一倍心懸て居る人間であります。けれどもこんな強烈な生の欲求者であり現世の執著家たる私が妙に死には淡泊であります。

□勿論私が死に淡泊なのは、あの『我存する時死來らず死來る時我存せず』と濟まし込んだ哲學者の哲學にかぶれたのでもなく死生

一如と悟つた譯でもありません。生きて居る間は生を愛して出来るだけ生甲斐のある生活を爲る。死なねばならぬやうになれば靜かに死ぬとザットこんな風に決めて居る。これが私の死生觀であります。頗る簡單明瞭なものであります。

□斯ういふ簡單明瞭な死生觀を懷いて死に對して淡泊な私は肺病だとお醫師さんに言はれて肺病の次に來る死といふ事實が鼻の先にちらつくやうに思はれたけれど直ぐ『それでも仕方がないぢやないか』と誰かゝそのちらつくものを取つて呉れたやうな氣がして平氣でありました。

□私は肺病なら何年程経つたら死ぬんですとお医者さんに聞きました。死ぬに極つた事は無い。養生次第で治りますとお医者さんは氣毒さうな顔をして言ひました。養生次第で治るものならそんなに氣毒がるにも及ぶまいと可笑しくなつて思はず笑ひました。何がおかしいかとお醫者の速水さんは妙な顔をしてたづねました。それがおかしいんで又笑ひました。むつかしい顔をした速水さんもとう／＼笑ひました。

□僧侶は呑氣なものです。私もお金が出来たら坊さんになるつもりだと言つて身上ばなしを始めました。この人は私が東京の

學校を出た年に京都の大學を出た醫學士で、私と同じ年でありました。何でも早くお金儲をしようと思つて田舎で開業したのだが、旨く儲からないなど言つてゐました。

□それから、いろんな世間話をして肺病といふものは精神を安らかに持つのが第一で、次に滋養物、第三が空氣、薬はどうでもよい位、それから先づあまり勉強や心配事をしないで、おいしい物をたべて、なるべく須磨邊へお出懸けなさいと言つて呉れました。

□滋養物は、こんな山寺では、月に一二度町へ使を遣つて、硬い牛肉を買つて來る位なものです。空氣は冷かすぎて好くないさうです。

心配事はすん／＼殖わて來ます。おまけに、著述とある研究論文に取掛つてゐたんで、中々精神を安らかに持つといふわけにはまゐりません。たい、お醫者さんの言葉通りにしたのは、薬は何うでもよいとして用ひませんでした。

□ 牀に就いたのが彼岸過でしたが、小春日和の暖かさに、無理に起きて京都へ出掛けて、ツイ大學病院で診察して貰ふ氣になつて、さる恩人からお金を少しばかり借りましたが、電車に乗つてからツイ厭になつて、まづ速水さんの言ふ通りに肺病と決めて置いて、出來るだけの養生をして、壽命のある間に早く研究論文を片付けて了はふ。途

中で死んで了へばそれまでだと、ふいとこんな氣になつた私は、そのまま、自坊へ歸つてしまひました。

□ 歸つてから、いろ／＼な病の厭な現象がありました。盜汗、惡夢、うして時々厭な咳が出て、身體は追々と衰弱するやうな氣がします。けれども、覺悟を決めた私は、そんな病の現象とは無頓着なやうに、やはり寺のつとめや勉強をついけました。もつとも厭な時には書物は讀みません。筆も執りません。氣分の好い時は一生懸命に遣るといつて別に焦せるやうな事はいたしません。なるべくゆつ／＼とした氣分でなるべく病氣の事は忘れるやうにしてゐました。

□ そのうちに冬が来て霜も降り雪も降り冷たい北風がビュウくと吹いて來ます。年の暮で世の中は物騒がしくなつて來ました。歳末の用意には人一倍の勞力を要する苦しい經濟的の位置に在る私はちつとしてはゐられなくなりました。それがため、こんどは本統に病氣を忘れてしまひました。

□ 不思議な事には、たつしやな時でも毎年冬になれば、半病人になる私が全然病人になつてゐるのに、今年は存外元氣で立働きました。お正月になつても矢張り元氣でした。其のうちに血色も追々よろしく、咳もあまり出ないし、盗汗や悪夢も見ないやうになりました。

それから日數は大分経つたが私は追々と元氣になる一方、私が病人だといつて人本統にして呉れません。自分でも本統に出來ません。肺病だなどといつても人は戲談としか思ひません。自分でも、今では屹度お醫者さんの戲談であつたと思つてゐます。本統の病人であつたにしろ、こんなに元氣でこんなに何の不快感も感じないやう以上、健康體と變りはないと思ひます。

□ 私はもう實際病氣を忘れてしまひました。忘れて了つたといへばおかしいが、全快したのであります。全快したと信じて總べての行動を取つてゐます。あなたも早く御病氣を忘れてお了ひなさ

い。病氣だくと思ひつめてゐた所で、治る時分が来なければ治らないし、出来るだけ養生した揚句、治らなければ死ぬより外仕方がありません。これが人間の當然逢著する自然の筋道であつて自然の力には勝たれません。

□お互に佛教信徒です。多年信仰の薫習を受けて居る有り難さには、死といふものに對して普通の人以上は恐怖を懐く度合が少いのは事實です。私がこんな平氣で居られるのも、此の多年の信仰の薫習の結果、知らず識らず帝の則に従ふで佛の信仰の力に知らず識らず支配されてゐる結果だと喜ばなくてはなりません。

□私は既に現世の圓滿を信じ、現世の生活の上に極樂が現じて居る事を信じてゐる一人、死の問題にも無頓着と共に死後の問題を考ふる程、取越苦勞はいたしません。現世の生活の上に極樂が現じてゐる以上、未來世界にも此の世界が存続するものと信じてゐます。未來世界は私共の經驗にない世界で、不可知の世界であります。不可知の世界を有ると信ずるのは、私の信仰であります。多年の間、佛敎に養はれた信仰力の薫習であります。明らかに書くことは出来ませんが、兎に角さう信じてゐます。念佛を申したり、御經を讀んでゐると、いつとは知れず、斯ういふ風になるのは、妙ぢやありませんか。